

# 天うつ浪

第二

幸田露伴

明治四十年一月 春陽堂



# 天うつ浪

## 第二

### 其一

『それからといふものは當人も、一旦死ぬとまで云つて遺して置いて死損なつたんだから、流石にきまりが悪いか差しいかして、パツタリと音沙汰を聞かせなかつたが、何でも後で聞いた談話の模様で考へて見ると、一霎時の間は茫然と仕て居たんだぞ。

そのうち段々氣が鎮まつて、斷念が自然について來ると、源の事は捨てたものと仕て仕舞つた様子だが、さあ持前の氣性のあるところへ捨鉢が加勢したから、輪をかけてお狭になつたと見えて、叔母が婿にと定めた男を嫌つて、——何でも其の男が持いで金錢を溜めるよりほかにやあ何も知らない。人の情合や意氣張も分らない牛のやうな男になると

いふのでだを捏こねたのだから、とうく大紛おほごたく紘こねが持ち上あがつたのさ。叔母おばは昔むかし風ふうだから嵩かさにかゝつて、妾わたしが可いいと定きめて先方むかふへも話はなしたのだから、今更いまさら變改へんがいは出来できも仕しないし、また金かねはあり人物じんぶつは堅かたし、婿むこにして不足ふそくのある男をとこでも無いのに、厭いやの嫌きらひのといふのは我儘わがままだと叱しかれば、男をとこの方ほうからも喧やかましく逼せまつて來くるので、お龍りゅうも氣きの弱よわい娘こなら折をれて仕舞しつて、其男それを婿むこにして身みを固かためるところだつたが、毅然しつかりとして分別ぶんべつがあるといふんでは無いけれど、妙めうに氣きの冴さえた、萎ひけて居ゐない娘こだから、たとへ金かねが無なくつて人物じんぶつが堅かたくなくつて一めつちで跛足びつこで有あらうとも、其その心意氣こゝろいきさへ妾わたしの氣きに入りやあ、妾わたしあ亭主ていしゆにでも何なんにでもするが、味あじの無い石瓦いしかはらのやうな人ひとに添そふ事ことあ出来できませせん。第一だいいち妾わたしあ人の縁合えんあひの談はなしに、目上めうへの者ものが壓制おしつけわざを仕しやうとするのは蟲むしが嫌きらつてなりません。大おほきな御世話おせわです。要いらない事ことです。妾わたしあもう人ひとの内君おかみさんなんぞになれなくつたつて構かまはない身體からだです。好すきな人ひとになら妾わたしにでも情婦じやうぶになつて與やる代り、嫌いやな人ひとになら奥様おくさんになれ御臺所みだいどころになれつて云いはれたつて嫌いやな事ことです。と恐おそろしい亂暴らんぼうを云いつて叔母おばと舌戰せりあつたさ

うだよ。』

『なる程なア！。考へて見りやあ愍然なところが心底にはあるぜ！。しかし餘程異様な出來の娘だナ！。』

『マア左様さ。自棄から出て居る料簡なんだから云つて見りやあ愍然などところもあるのさ。それでも先方の男が氣が廻ら無くつて、話が中々壊れないので、そこで彼の娘は痲癩を起して、今年の三月に駿府を脱け出し、何といふ目的があつたのじやあ無いが、何をするにしても自分の勝手に世を送らうといふんで、ふらりと東京へ遣つて來たのさ。すると銀座の往來でもつて、ひよつくりと源に會つたゞらうぢや無いか！。』

『や、そりやあ大變だ！。おもしろい、面白い！。さうして、』

『源は只無暗に雜沓へ入つて逃げて仕舞つたんだが、其の時の様子をみて可怪いと勘付いたから、さあ彼娘は竊と源の様子を内内で搜つたんだね。すると源の心中が眞實に讀めたから、どんなにか口惜がつた事だらうさ！。』

『ン、道理だ、口惜かつたらうさ!。』

『甚く力を入れるね、可怪いよ。それからお前何處に何様して買ったんだか、人を騙して取りでも仕込んだか、袂の中に短銃を秘してね。』

『ヨーツー、凄いなア。』

『たしか銀鼠だつたと思つたが薄い色の頭巾を深く被つて、四日のお月様の丁度出て居た暮合の點燈頃を、源の家の横丁の角に立つて居たのが此の四月だア子。ほんとに考へて見ると怖い事さア。』

『ン、ン、』

『それをちらりと見た妾の、銀座で會つたといふ話も源から聞いてたから、こりやあ気取つて仕舞つて話を仕掛けて、其晩は吾家へ寝させて置いて、源夫婦に内通を仕て遣つたんで、何事も起らずに済んで仕舞つたんだよ。』

『ア、惜い事を仕た。ドンと遣らせりやあ好かつたのに!。』

『戯談ぢや無いよ、下らない!。源夫婦は怖がつてくゝ子、弟子のあるのを幸ひに仙臺へ竊と拵ぎに行つて仕舞つたのさ。それからいろく』

理解を云つて聞かせて、とう／＼宅へ置くやうに仕たんだが、左様い  
つた氣性だからまた男が好いて、段々と妾のためになり出したね。』

『そりやあ左様だらう、中々値の踏める奇貨だわエ。』

『そこで前途の考案もあるから、すつかり妾のものに仕て仕舞はうと思  
ふんだが子、まあ第一にチャンと關係を切つちまはなけりやあならな  
いのが叔母の方だ子。』

『ン、そりやあ譯は無え、乃公が法をかいて遣らあ。』

## 其二

『眞實に譯無く此方のものに出來やうか子。』

『出來るともさ！。併し戸籍までといふ譯にやあいかねえ。籍まで御前の娘にしやうと云ふにやあ、お前が岩崎の家を退いて仕舞つて一本立ちになるか、二人の子を順々に白痴か瘋癲かに云ひ立て、相續權の無いやうに仕舞はなけりやならねえが、そんな事は逆も出來るとぢやあ無え。』

『そんな事は損になるから詰らないや子。いくら氣に入らない子だつて何だつて、若い者あ何様に出世をするか知れや仕ないんだもの！、金錢が要らないなら其の親になつての方が利に當るぢや無いか。』

『ハ、ハ、ハ、繼子二人の親になつてのを、抽籤前の勸業銀行債券でも持つてるやうに思つてるのか。ハ、ハ、ハ、お前は眞實に伶俐だ、好い料簡だ、感心した。』

『お冷やかして無いよ、馬鹿にしてツ!』

『それだつて二人も子があるのに其上に又、あのお龍も眞實の養女に爲やうなんて、あんまり蟲が好さ過ぎるからナ。』

『ぢやあ何様すりやあ可といふのかエ。』

『何様するも此様するも要る事ぢやあ無い。つまり叔母といふ奴が頭さへ出して來ないやうにすりやあ好いのだらう。』

『左様さ!。彼女を囮にして獲つた禽を、他の手へ取られるやうな事さへ無きやあ畢竟いゝのさ。』

『だから譯は無えといふのだ、矢筈にかけるんだナ!。』

『矢筈にかけるつて、何様いふやうに?。』

『叔母のところへポーンと一本手紙を遣つて、斯様いふことを云つて遣るのだ。妾は師匠と弟子との縁で、其方のお龍さんを何月以來食客に仕てゐます。聞けばお龍さんは複雑んだ譯で、其方を無言で出て來たのださうだが、一季半季の奉公人でも、定めるところは確然と定め習いだから、何の定も無しに無際限に置く譯にはいか無い。當人の

料簡ぢやあ其方へは歸りたく無い、此地で藝の師匠でも仕て暮したいと云ふ事だし、妾の目で見ても當人の藝の性質に見込があるから、若し全とお龍さんを妾の娘分にして、妾の跡を襲がせても宜いと云ふのなら、今までも世話を仕たが猶此上とも、立派に藝の成就るまでは何年でも世話を爲やうが、そちらが左様いふ氣で無ければ此地でも困る。たゞべんくとは世話も出来ぬから、今迄世話を爲た食雑用を入れて、其方へ引取つて貰ひたいものだ。しかし當人は何様いふものだから、甚く其方の事を悪く云つて、田舎へ返される位なら舌を咬んで死ぬなぞと、無茶を云つて居て眞に困ります。と斯様いふやうに掛合ふのだ。遣すなら縁切にしろ、返せなら食雑用を入れろと、金額を大袈裟にしてどうだくで責めるのさ。さうすりやあ大概姪一人捨てた氣にならうぜ。』

『でも食雑用ぢやあ月十圓にしたつて知れたもんだから、大袈裟に爲やうも無いぢや無いか。』

『智慧の無い事を云つたものだ！ 衣服や髪飾りを少し買つて遣つて置

「きやあ、大した金額に註加が出来らあナ。」

「成程ネ。それでも連れて歸つたらば?。」

「その時はまた後で策を爲るとして、食雑用と縁切とで一吋暖まつて湯治とでも洒落たが宣い。」

「縁切とはエ?。」

「お龍が駿府へ連れて行かれると定つたら、お前が源の親父へ衝突つて、此方の息子さんが悪いのだから、空拳では話は濟みますまい、いくらかの手切金を御與んなすつて、彼の娘を駿府へ歸らせた方が宣うございませう、左様爲ないと何時までも關係があつて、何様な事が起るか知れませんか、と少し巧く口をきくやあ必定取れらあナ。源の家ぢやあ怖がりきつて居やうから、出さうぢやあ無えか。其金を此方の懐中へそつくり入れて、お龍は叔母に連れさせて歸しちまふなぞあ、まんざら野暮ぢやあ無えか。」

「さうさねえ。成程野暮ぢやあ無えぢやあ無えかだ子。ハ、ハ、これだからお前は悪徒だつて云うんだよ。」

『笑はせやがる！。番毎に悪口だ。』

『ナニ褒めたんだよ。』

『碌でも無え褒めやうだナア、有り難くも無え。そりやあ其様とお龍はもう全く源に未練は無えか。』

『いろ／＼理解を云つて聞かせたから、今ぢや怒つては居るやうだが、思つては居ないぞ。』

『先刻の言の通り男にやあ懲りてるか？。』

『ナアニ彼様は云つてるが、今ぢやあもう、張りに来る若い男たちにちやほや云はれるのを、可笑がつて遊んで居る位だもの、そして又前々からの性分ぢやあ有るが、身だしなみを氣にして、髪なんぞも髪結に結はせる時の間にやあ、やれ何の、彼のと、流行を追つて束髪に異なるまで仕て、男たちに好いとかわるるか可笑しいとか云はれて、おもしろさうに笑つて騒ぐのなもの、一寸氣に入つた男にでも逢つた日にやあ、合點で一ト苦労して見やうと云つたやうな調子が見えるね。』

『フーン。』

『だから吾家へ来る若藏たちの中で、傳でも清でも關はないが、誰かと  
 出来るやあ宣いと思つてるのサ。』

『解らねえナ、何故?』

『何故つて情夫が出来りやあ金銭が要るは子、金銭が要りやあ自然に欲  
 しがるは子。金銭を欲しがらない我儘者にやあ困るけど、金銭を欲し  
 がる奴なら何様な事でも爲せられるから子!』

『違無え!。其様な急處を捕へやうと思つて待構えへて居るのか  
 エ?。オ、怖い!。何の事は無え、他の色戀は汝の餌食だナー。』

『ハ、云つて見りやあ其様なものだ子。一體流行も仕無い三絃の御  
 師匠さんで、澄まして遣つて行かれるのは、餌食になる奴がザラに有  
 るからだアネ。つまり男さへ見りやあべろつく娘や、女さへ見りやあ  
 でれつく男が、世の中に澤山有る中あ、下らない小説でも御客様は絶  
 えないし、弾けも仕ないお師匠様でも斯様して御酒も飲めるんだから、  
 フン有り難く出来てる世界さネ。ア、お龍もとう歸つても来るだらう  
 し、物も持つて来て呉れりやあ水も汲んで呉れるといふ重寶な人達も

そろく来る時分だ。お前一ト足先へまた寄席へお出でナ。妾もお龍を置いて後から出掛るよ。左様するとまた其場に居合せた若い奴に有り難がられるのだからをかしい!。」

住處も業體も明らかならぬ男は點頭きて去り、引違へてお龍は歸り來りぬ。

もとより色白の、特に浴上りなれば、少し上氣して紅潮したる面の一トしほ麗しく、嫣然と笑める頬に笑靨少しよりて、これが短銃を袂にして情無き男を撃たんとしたる恐ろしき女とは更に見えず、たゞこれ垂絲櫻の艶に咲きほこつて、吹けよ春風、吹かば狂はん、降れよ春風、降らば濡れんと、春は十分の花の色香に、溢るゝばかりの優しき情の浮めるを見るが如し。

夜は男弟子の世界なり。やがて清といへるが入り來れる時、女主人は稽古をお龍に托して、用事ありと云ひて寄席に去りしが、それより傳も來り勝も來り、誰も彼も來りて、皆お龍が機嫌とりぐに、富士の白く優しきを取巻く夏の山々と、いかつき身體の背をくゞめ頭を低く

其二

してしほらしくしたるもをかし。

## 其三

春闌けたる上野の夜は深く人は稀にして、白き綿雲の地に宿れるが如く爛漫と咲き亂れたる櫻の梢に、おぼろ月の光薄りと照らして、一場の景色は夢のやうに淡し。

『あら源さん、酷いよ、御待ちつてば、御待ちつて云ふのに!。』

男は妾が言葉を耳にも入れず。振返りもせずして唯走り走り去る情無さ味氣無さ。其の後姿は幾本の櫻の幹より隠れつ見はれつして、見るく遠く花の蔭の糝糊と白きが中に消え行かんとすれば、心も更にならぬ。御召縮緬の着物の生憎に足に纏繞はるを煩さしと苛ちながら、芝翫下駄も踏みかへしたるまゝ脱ぎ捨て、足袋徒跣の脛あらはなるさまの我羞しきを厭ふに暇無く、跳る胸の氣息苦しさを堪へ、

『源さん』

と又一ト聲呼ぶに、男は猶心強くも走つて已まず、返響のみ我が耳に、

『源さーん』

と悲しく聞こえて、天地は情無くしんくくと物寂しく、月もぼんやり、花も朦朧、何とも云へず只静にして、我のみの騒ぎ悶ゆるを笑へるが如し。

『源さーん』

堪へかねて又一度呼べば、

『源さーん』

と花の間より返響のみ又一度繰り返したる其の聲の響くに連れて我が頭上なる花はちらくくと散りかきりて、忽然として眞實の雪となり、見やる彼方には廣々としたる川原の見はれて、其處を流るゝ水の勢強きに、渡舟無く橋無ければ男は逃げまどひて、哀憫を乞ふが如く此方を振り返りぬ。戀しかりしは先刻の程なり、今は憎さ恨めしさのむらくくと湧き上りて、思はずも手にしたる短銃の引金を引けば、どんと云ふ音の中に白煙ほつと立つて、源は朱になりつ撞と倒れたるが、源の倒るゝと同時に其の身後に、記憶も無く名も知らぬ若き男の、

明らかに此方を向きて悠然として岸に立てるが見えたり。流石に人を殺したる身の罪に、心は度を失ひて慄れ戦けるを、彼の男は寛大に清しき聲して、

『赦す、赦してやる。』

と優しく云ひたる其聲の、何故とは無けれど身に沁みて嬉しく、骨も溶くるやうに悦ばしと思ふにつれて、忽地今までの妾が振舞のはした無かりしが口惜しく慚しく、顔に火の照るおもひして、何とか言はん言はんとすれば、舌も結ばざれ唇も動かず、有り餘る胸の思ひを現すに由無く、苦しみくくって氣息塞りたり。

『お龍ちゃん、お龍ちゃん、何様お爲だよ。お龍。大層驚されて居るぢや無いか。』

『ア、御師匠さん!。』

覺めたれども猶茫然として、星眼うつとりと懶げに動かず。

『汝何か怖ろしい夢でも見たかエ。お廉くない夢かなんぞぢやあ無いか。』

『あらお師匠さん、嫌な！。何か言つて？。』

『何だか分らなかつたよ、妾も今日が覺めたんだもの。夢は五臓の疲勞だつて云ふぢや無いか。昨夜妾が寄席から歸つて、それからまたお五十の談やなんぞを遅くまで仕たもんだから、屹度お前五臓が疲れたんだよ。それで魘されたりなんぞ仕たんだらうよ。』

『そんな事かも知れませんよ。オヤツ、今朝はお師匠さんの代りに四ツ木へいつて御病氣見舞を爲る筈でしたつ。斯様しちやあ居られないんでした、まあ起きましましやう。しかし何だか可怪な夢を妾あ見ましたよ。』

起きんとして起きず、枕に俯臥して、美しき頸脚を惜氣も無く見せつ、名も知らず顔も定かならで聲のみを聞きたる夢の中の其人を思ふにやあらん、凝然として少時思想に耽りたるが、寐みだれる髪のほつれてかされる横顔ふくよかに白くして艶なり。

## 其四

近く窓外を過ぐる物賣りの聲は尾を引いて長く、少し隔たりて聞ゆる  
 大通りの車馬の響は一ツになりてがやつき出す日本橋は本銀町あた  
 りの某の横丁の朝景色、建ちならべる家々に家々の聲あり物音あり  
 て、子供あるところは先づ騒々しく、若俊が多きところは笑多く、火  
 の燃ゆる音、水使ふ音、夜明けより一二時間ばかりが程の一トしきり  
 賑やかなるは家ごみの市中の常の態なり。

いつもの晏起には似ず今日は早起して、お關の家の朝食は疾に濟みぬ。  
 既に髪を理め身じまひしたるお龍は、今また衣を更め帶を換へて、こ  
 れより四ツ木へ赴かんとはするなり。

女主人は帶止めの美しきをお龍に渡して、  
 『一寸と見ておくれ、此品あ妾が汝にあげやうと思つて取つて來たんだ  
 よ。昨夜直ぐあげやうと思つて居たが、つい忘れて仕舞つた。夜だつ

たもんだから、能く分らなくつて、今見ると色が何だか思つたやうぢや無いが、汝厭で無けりやあ締めておくれナ。』

『あら勿体ない、佳い色ですわ。ちつとも可厭な事なんぞありあ仕ませんが、ほんとに此品あ戴いても宜いの?。』

と、我を愛し呉るゝ女主人が情を、深くも悦べる其の眼色に、少からぬ感謝の意は表れたり。

『いゝともさ! お前<sup>まへ</sup>にあげやうつて買つて來たんだもの!。それぢやあ御苦勞<sup>ごくろう</sup>だけれども行つて來ておくれ。いゝかエ、吾妻橋<sup>あづまばし</sup>から直瀛車<sup>すくきしや</sup>に乗つて、鐘<sup>かね</sup>が淵<sup>ふち</sup>といふので下りて右の方<sup>みぎ</sup>へ眞直<sup>まつすく</sup>に行きさへすりやあ造作<sup>ぞうさく</sup>ないんだよ。だけど田舎道<sup>いなかみち</sup>だから聞き聞き行かないと損<sup>そん</sup>をするよ。』

『ハイ、よろしく分りました。狐<sup>きつね</sup>に魅<sup>ま</sup>されないうやうに參りますよ。ホ、ホ。』

『ハ、ハ、ほんとに田舎道<sup>いなかみち</sup>でまごつく位器量<sup>くらみきりやう</sup>の悪い事<sup>わる</sup>あ無いから子、よ

く魅まされないやうにお仕しよ。ハ、ハ、。それから、あの、忘わすれてもお五ご十じゅうのところへ行いくんぢやないよ。傳うつ染つつた日ひにやあ間ま尺やくに合あはないから子こ。たゞ水みづ野のつて云いふのが世せ話わを仕して居ゐやうから子こ、其それ男おとこに會あつて見み舞まひの口くち上じやうを昨けつ夜ふべ教をしへて置おいた通とほりに云いやあ宣いんだよ。つまり病びやう人にんは何どう様ようだつて構かまはないんだが、その水みづ野のつて男おとこへの義ぎ理りでもつて、お前まへに行いつて貰もらふやうな譯わけなんだから子こ。』

『ハイ、何なんだか能よく分わかりませませんけど、宣いい加か減げんに申まをして置おきやあ宣いいのでござごいませましやう子こエ。』

『ハ、ハ、左さ様さうさ、左さ様さうさ、それで宣いいとも！。妾わたしが顔かをを出だしやあ何い程くわ嫌いやでも直ぢ接かにお五い十そを見み舞まつて遣やらなきやならないんだから子こ。平ふ生だん交な情なの悪わるい奴やつの疫やく病びやうなんぞを、四よツ木ぎくんだりへ見み舞まひに行いくなんて、可い厭やな事ことちや無ないか、馬ば鹿か々々しいわ子こ。

だから妾わたしあ寸す白ぱくが起おこつて居ゐるんで出でられないからとか何なんとか云いつて子こ、娘むすめが生いきても死しんでも構かまはないか、あんまりな人ひとだと、水みづ野のに思おもはれないやうに云いつて置おいて呉くれさへすりやあ其それで宣いいんだよ。水みづ野の

に悪く思はれないやうにして置くと、また好い事があるかも知れないんだから。』

『ハイ、宣しうございます。ぢやあ水野さんて仰あるのは、畢竟お五十さんの御婿さんになる筈の方なんですか?。』

『ナアに左様ぢやあ無いんだよ、何でも無いんだよ。お五十には散々に嫌はれてゐるのさ。』

『へエー、何だか譯が分らないの子。それぢや御師匠様の方でお五十さんの御婿さんになさらうと思つて居らつしやる方なの?。』

『い、え、左様といふんでも無いんだよ。妾あそんな餘計な世話焼きなんか嫌な事た子。』

『へエー、妙子エ。些も譯が分らないの子。そしてその水野さんて怖い人ですか。』

『何だ子。もう男を怖がる筈のお前でも無いぢやあ無いか。高が書を讀んでるばかりの書生坊で、柔かいんだか硬いんだか何だか、恰で赤小豆の煮えこじけたやうな變な可厭な男さ。』

『へエー、兎も角もまあ行つてまゐりまじやう。ぢやあ食後片付けもいたしませんか……』

『いゝよ、お構ひでない、さあ早くおいで。今朝桂庵が婢を連れて来る筈だから。』

『ぢやあ、行つてまゐります。』

『氣をつけておいで。』

見舞品にや風呂敷包の小きを持つて、街へ立出でたる色白のお龍が、小ざつぱりしたる着付、すらりとしたる姿は、忽ち往來の職人の眼を惹きて、

『吉や、見ねエ、小股の切り上がつた好い新造だナア。』

『ウン、打殺めて遣りてえナ。』  
と叫び出さしめぬ。

## 其五

我が五十子にさしたる異狀無しといふ尾竹が言葉に心安堵きて、徐々に我が寓に歸れる水野は、主人の吉右衛門が老實なる注意に任せて、其夜は早くより臥床に入りけるが、疲れきつたるが故にや却つて睡りかねたり。

一ト間を隔てたる茶の室の燈の下に、老夫は悠々と煙草を喫せば、孫娘のお濱はまた一心に何の書をか讀めるさまの、折々其の煙草管をはたく音、書を開け翻す音の耳に入る度、いと明らかに思ひ遣られつ、それに打交へて五十子が病、島木が情、お澤婆が憎さ、觀音堂の朝の感じ、椎の樹蔭の夕の思など、廻り燈籠の其影像の如く繰返し々胸に現はるゝに、幾度か幾度か寝返り打ち寝返り打て睡らんとしても睡られず、ほどく自ら困じけるが、やがて何時と無く心鈍りて、天地を薄霧に包み行かるゝが如き思をしつゝ、辛くも我我をおぼえぬ境に

入りぬ。

疲勞は名殘無く一睡に消えて、明けての其の朝は我が心のいと清々しきに、お澤が許に置ける婢のお鹽といふより、五十子が病も平なりとの報知をさへ得たれば、水野は此頃におぼれ無く氣合冴々しく、先づ島木に當てゝの謝狀を書き、次に羽勝に當てゝ過ぐる日の會に不参したる理由を書きて我が心の變り無きことを云ひ遣り、また五十子が繼母のお關に對つては、五十子が病狀の概略と手當の模様とを知らせやりて、さて朝食を濟ませて立出でつ、常の如く正しくおのが職務を執りぬ。

此の日は曇りたれども風無く、五十子の容態は晝も佳く黄昏も佳かりければ、水野は愁の眉をも聊か開きて、憂きが中にも心樂しさをおぼえ、特に明日は休暇日の土曜といふに、ひとしほゆつたりと氣を寛げて、夜は靜なる草屋の秋に、燐々たる孤燈の前、机に憑つて端座し、萬斛の胸の思を忘れんとてや、一卷の書に精神を潜めて、つくぐと讀み入つたる其の風情は、雷電こゝに落ちかゝるとも露知らで過ごす

べき状態ありさまにて、身みは深山しんざんの岩室いはむろに入定にふぢやうしたる昔むかしの權者ごんじやの、形骸かたちくず壞れず  
在あるが如ごとくに動うごかず、眼まなこは寒潭かんとんに影かげを宿やどせる霜夜しもよの星ほしと光ひかり澄すみつ、  
世よに何物なにもののあるをも忘わすれて、花はな咲かば咲さけ、花はなをも眺ながめじ、雪ゆきふらば  
ふれ、雪ゆきにも興きようぜじと云いはぬばかりに念おもひもつぱらを專せんにし、平生ひごろの水野みづの某なにがしの性もち  
質まへを現あらはして、凍こほりたる水みずの流ながれぬが如ごとく、いつまでもかくてあるべき  
様子やうすに見みえたり。

## 其六

『せーんせい!』

水野は振り返りて見れば間の襖は開き居て、そこに身體を半分此方の燈に見せつ、お濱は我が方を打護り居たり。

『あゝ吃驚した!。何だね?、お濱ちゃん、突然に其様な大な聲をして!。』

頭髮を結ばずして後方に下げたれば、ひとしほ兒童らしく活潑に見ゆる面の、小さけれど清しき眼を出来るだけ見張りて、

『あら、先生くくつて幾度呼んだか知れやしませんのに、ホ、先生が又夢中になつて居らしたんだは。』

と、お濱は憚り無く事實を語りて、却つて水野を難じ反しぬ。

『左様かエ、それぢやあ私が悪かつた、堪忍くく!。そして何か用?、用ぢや無いの?。』

『御爺さんが子、番茶ですが出來ましたから御飲りなさいませんか御茶受は柴栗の燂でたのぼつかりですけれど、御茶でもあがつて、そして餘り根氣を御詰めなさらないで、もう御休息なすつた方が宜うございましてやうツて!』

『左様!。そりやあ有り難う!。それぢや其方へ行つて御馳走にならうが、栗はお濱ぢやんが剥いて呉れるのかエ。』

『いやよ、ずるい事子エ先生は。ア、好いは、妾が剥いたのは先生にあげますから、先生も妾に剥いて頂戴ナ。』

互に戯れて言ひながら、お濱は紐るやうに水野の手を取つて誘へば、水野はまた扶くるが如くお濱をあしらひて、共に直に茶の間に至るに、果して焙じたる茶の香は一室に充ち満ちたり。

三人は一ツ燈の下に鼎に坐りて、互に其の清らに和しき心より溢るゝ何とは無しなんの微笑を取り換しつ、言はず語らずの中に何事も無なき此夜このよの静さを相悦あいよろこべり。

もとより廣からぬ家の事なり、吉右衛門は二人の應答を悉く聞きた

れば、

『また先生に甘つたれるよ。先生に剥いて戴いて食べやうなんて、お前のやうに遠慮を知らない女は有りやあ仕ない！。ハ、ハ、ハ、さあお茶を御あげ、栗も汝巧く剥けるなら剥いておあげ。』

と、一寸眞面目には窘めながら、叱るが矢張笑顔にて、更に叱るにはならぬもをかし。

『イヤ、ほんとは栗は剥いて貰はなくつても澤山だよ。お濱ちゃん！。危い手つきか何かでもつて剥いて貰つて、指でも負傷をされやうもんなら大變だから子エ。』

かくいふ間にお濱は其の香ばしき茶を茶碗に注ぎて、一個は水野の前、一個は祖父の前に差し置けば、

『ぢやあ御勝手に、』

と、小き箆籬に入れたる栗實の今燻で上げしばかりと見込て猶其の皮の蒸氣に濕れるに小刀添へて盆に載せたるを主人は差し出しぬ。

『いゝわ、先生！ そんな事を云つて！。澤山でも何でも剥いて上げま

すよ。危<sup>あぶ</sup>つかしい手<sup>て</sup>つきだなんて云<sup>い</sup>つたから猶<sup>なほ</sup>剥<sup>む</sup>いてあげるわ。さうして若<sup>も</sup>萬<sup>じゆつ</sup>一<sup>とけ</sup>負<sup>が</sup>傷<sup>が</sup>を仕<sup>し</sup>て血<sup>ち</sup>でも出<sup>で</sup>たらば、その血<sup>ち</sup>の着<sup>つ</sup>いたのもあげるからいゝわ。』

『あゝ、もうあやまつた、怒<sup>おこ</sup>つちやあいけない。私<sup>わたし</sup>が二<sup>ふた</sup>ツ三<sup>さん</sup>ツ剥<sup>む</sup>いてあげるから中<sup>なか</sup>直<sup>なお</sup>り中<sup>なか</sup>直<sup>なお</sup>り!』

『ナアに優<sup>やさ</sup>しくなさると猶<sup>なほ</sup>増<sup>ぞう</sup>長<sup>ちやう</sup>します。そんな下<sup>くだ</sup>らない事<sup>こと</sup>を云<sup>い</sup>つたのをとツこに、指<sup>ゆび</sup>先<sup>さき</sup>が痛<sup>いた</sup>くなつて困<sup>こま</sup>る位<sup>くらゐ</sup>剥<sup>む</sup>かせて御<sup>お</sup>遣<sup>や</sup>んなさる方<sup>ほう</sup>が宣<sup>ま</sup>うございますのに。ハ、ハ、ハ。』

『ハ、ハ、憫<sup>かあ</sup>然<sup>いぜん</sup>に!。お濱<sup>はま</sup>ちゃんも御<sup>お</sup>爺<sup>ぢい</sup>さんに會<sup>あ</sup>つちやあ敵<sup>かな</sup>はない子<sup>こ</sup>。』

『いやもう然<sup>さう</sup>様<sup>じやう</sup>ではございませぬ、此<sup>これ</sup>女<sup>め</sup>には老<sup>おやぢ</sup>夫<sup>ぢ</sup>の方<sup>ほう</sup>が始<sup>し</sup>終<sup>しゆう</sup>弱<sup>じやく</sup>らされませぬ。談<sup>はなし</sup>話<sup>わ</sup>をしる談<sup>はなし</sup>話<sup>わ</sup>を仕<sup>し</sup>ろつて強<sup>せ</sup>請<sup>が</sup>みまして子<sup>こ</sup>。自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>が散<sup>さん</sup>々<sup>さん</sup>に書<sup>ほん</sup>を讀<sup>よ</sup>んで置<sup>お</sup>いて、まだ其<sup>その</sup>上<sup>うへ</sup>に其<sup>その</sup>談<sup>はなし</sup>話<sup>わ</sup>を仕<sup>し</sup>ろつて責<sup>せ</sup>めるんですもの。』

『あら御<sup>お</sup>爺<sup>ぢい</sup>さん、そりやあ過<sup>こ</sup>日<sup>ひ</sup>の晩<sup>ばん</sup>ばかりだは。ありやあ書<sup>ほん</sup>がむづかしくつて妾<sup>わたし</sup>にやあ分<sup>わか</sup>らなかつたからだは。』

『一體<sup>いったい</sup>何<sup>なん</sup>の書<sup>ほん</sup>だつたの?。』

『いやな書だつたの!』

『嫌な書てまあ、何といふ書?』

『お爺さん、黙つて居てよ。云はないで居てよ! 妾あたく本家から手當り次第に持つて來たばかりで、別に彼書を持つて來たんぢや無かつたんだから。』

『ハテナ、匿されると猶聞きたいが何の書だらう?。』

『イヤ新しい活版刷の西洋綴の書にやあ彼様なものはよもや入つて居まいと思つて居ましたが。飛んでも無い書が入つて居ましたのさ。あの帝国文庫とかいふ大な本にでさア。』

## 其七

『いや古い本が新しくなつて澤山出るからね。左様して其の書は何と云ふ書だつたの?』

『ナアニ、私なんぞが面炮の出で居た二才の時分貸本屋で借りて讀んだことのある人情本で、初は甚く嫌はれて居た男の、其の親切が通じて思ひ思はれるやうになるといふ趣向を書いた下らないものでした。』

『ハ、ア、それぢやあ二筋道といふのぢやあ無いか、そんなら何様してひやくねん、まへ、百年も前の古いものだから、いくら總傍訓があつたにしても、こりやあお濱ぢやんには些も分らなかつたろう。私等にさへ明瞭とは解らなるところがあるんだもの!』

『ハ、ハ、彼様な書がまあ左様ですか子エ。成程いくら物を知つて居らしても御若いから何様も仕方ありません、御維新此方物事が全然異つて參りましたから子。さうすると昔の人情本の精く分るのは、此

席ぢやあ私わたしばつかりといふ譯わけですか。ハ、ハ、ハ、老夫おやぢもたまにあ貴あなた下よ  
り強いところがありますカマア。』

『詰つまらない自慢じまんを仕して！。をかした御爺おぢいさん！。どうせ御大名おだいみやうの行列ぎやうれつ  
なんぞ知しつて居ゐるのも御爺おぢいさんばかりよ。』

『ハ、ハ、ハ、また此この老夫おぢいさんをやりこめるよ。どうも左様さう此頃このころのやうに威勢いきほひ  
が強つよくなつては敵かたはないナ。もう談話はなしも何も仕なてやらないからいゝ。』

『いゝわ、あんな昔風むかしふうの御談話おはなしよりも、一昨日とつひから讀よんで居ゐる魯敏孫ろびんそんの  
御話おはなしの方がいくら面白おもしろいか知しれや仕しない。』

『魯敏孫ろびんそんの談話はなしつて、あの漂流記へうりゅうき？。』

『えゝ左様さうよ、あの魯敏孫漂流記ろびんそんへうりゅうきよ。』

『左様さう！。さうして彼書あれが其様そのまにお濱はまちゃんには面白おもしろいの？。』

『何故なぜ？。先生せんせいにやあ彼書あれが面白おもしろくないの！。先生せんせいは魯敏孫ろびんそんを偉えらいと  
は思おもはなくつて？。妾わたしあ眞實ほんとに彼あの人ひとが好すきだわ。海うみの中の小島こじまに  
唯一人ただひとりで、立派りつぱに生いきて行ゆくなあ偉えらいぢやありませんか。妾わたしあ彼の  
書ほんを讀よんで斯かう思おもつたわ。』

『おもしろい子エ。何様な事を思つたエ。』

『妾も何様かした譯で其の島へ行つて子、さうして彼の魯敏孫と一處に棲んで、荒い事は魯敏孫に仕て貰ふ代り、こまこまとした事は妾が仕て遣つて、晝間は一生懸命に働いても、夜や雨の降つた静かな日にはお話なんぞ仕て遊んで居たらば、ほんとに何様なにか面白からうかと思つたのよ。』

『ハ、ハ、。また下らないことを云ひ出したナ。』

『ハ、ハ、こりやあ面白い面白い！。ぢやあお濱ちゃんも魯敏孫の夫人になりたいたいといふんだ子。』

『いやな先生子エ。夫人だなんて！。妾あ他の夫人になつたり、他の良人になつたりする人は大嫌ひだわ。妾あ唯魯敏孫の朋友になつて見度いつて云つたのだわ。』

『ハ、ハ、成程、分つたよ。面白いねエ。つまりお濱ちゃんは女魯敏孫になりたいのだらう。』

『え、え、左様なのよ。ほんとに左様なのよ。眞青で際涯の無い大な洋の、』

塵も何も無い奇麗な島の中で、あの男兒らしい魯敏孫と、たつた二人で働いて居たら、妾あ何様なに好い心持だらうと思つて居るのよ。』

『これですもの、どうも、あれて仕舞ひます！。此女は取り分け無茶なのでございませうが、大なり小なり明治の生兒は、悉皆斯様なのでございませうか、まるで昔の女兒とは異つて居ります。二筋道の話をして聞かせるのも異なるものでしたが、あんまり何様いふ譯だ何様いふ譯だと煩く聞かれましたから、ほんのざつとした筋だけを話して遣りましたのに、碌にも遂げては聞きませんので、詰らないと一ト口に云つて仕舞ひましたのも、一體が斯様いふ調子ですから無理もありません。實に世の中は變つてまゐりました。』

『だつて祖父さん！。二筋道の御話は、嫌ひな人が好になるなんで、馬鹿げて居るんだもの！。』

『でも其が人情つて云ふものなんで、まだ中々汝達にやあ分らないんだよ。』

『そんな、嫌ひなものが好になる人情なんて、そりやあお行列の時分の

人情ぢやなくつて?。」

「生意氣な!。何が小児の汝なんぞに未だ分るものか!。」

『だつて幾歳になつたつて、妾にや分らないわ。妾や幾歳になつたつて、  
屹度お澤婆は嫌で先生は好きだわ。先生が嫌でお澤婆が好きにはな  
りやあ仕ないわ。』

## 其八

『ハ、ハ、。然様ムキになつて老夫に食つて掛ることは無いぢやあ無い  
 か。もう可い、可い。とても老夫は汝にやあ敵はないよ。しかし汝  
 がもう二三年も年をとつて、物事が善く解つて來ると、お澤婆だつて  
 其様に憎くは無く思ふやうになるかも知れないよ。先生だつて過日ま  
 でとは異つて、今ぢやあもうお澤婆を憎いとばかり思つては居らつし  
 やらないやうなもの。まあ何とでも云つて居るが宣い、人情といふも  
 のは年齢さへ老りやあ解る事だから。』

我が此上無く好きなる其人の、我が此上無く嫌へる其婆を憎しとのみ  
 は思ひ居らじと云へるを聞きて、お濱は且は驚き、且は訝り、疑惑の  
 眉を可憐らしく顰め頸を枉げて水野の面を覗き込みつ……、

『ほんとなの？、先生。先生あんな意地悪な悪らしい老婆が好になつ  
 たの？。』

と、さもく然らずといふ答を聞きて、改めて又我が祖父に對ひて勝ち誇りたげに尋ねたり。

水野は先刻より小刀をもて心長く叮嚀に栗を剥きつゝ、既に世に老いたる翁と未だ世を知らぬ少女との、彼方は經驗に頼り此方は空想に任せて、相和せぬ談を交ふるをば、おのづから催さるゝ微笑の間に聞き居たりしが、恰も此時奇麗に剥き終りし一箇の栗を、そつとお濱が掌の上に載せてやりつ、

『なにも好になつたといふ事は無いのだけれども、そりやあ憎いとはかりも思つては居ない。考へて見ると今では憫然でならないやうな氣さへする位だから。』  
と優しく答へて、

『お濱ちゃんだつて今に彼のお澤の腹の中が合點が行けば、彼婆を憎らしいとは思はないやうになるかも知れないよ。』  
と語を足したり。

水野が此語は如何ばかり思の外なりけん、お濱は呆れたる眼を睜つて

黙りけるが、吉右衛門は待設けしやうに言を挿みぬ。

『それ御覽、老夫の言ふ事も嘘ぢやあ有るまい。好きなものが嫌になつたりもすれば嫌なものが好きになつたりもする、それは皆人情といふものが爲せるんで、まだ中々汝達にやあ分らない事なんだよ。』

お濱は祖父が言を聞きもせずして、今貫ひし栗を無邪氣に食べながら、何事を思ひ廻らせるならん、あらぬ方に眼を留めて一寸考へ居れば、水野は又樂しげに栗を剥き居り、吉右衛門は煙草を深く吸ひて緩やかに其の烟を噴き出し居れり。

静寂なりしはたゞ一霎時なりき。お濱は何を思ひ得しにや忽ち嬉しげなる聲に淋しさを破つて、

『ア、妾分つてよ、妾分つてよ。五十子さんが今に快くなるとネエ、屹度大變に先生が好きになるんでしやう、ホ、ホ、それが人情つて云ふものなんでしやう。左様ぢやあ無くつて?、え、祖父さん!。五十子さんが先生を大好きになる、ア、左様なると好いわ、早く左様なると、妾五十子さんを姉さんに爲つちまふから、先生が兄さんで、五十子さ

んが姉<sup>ね</sup>さんで、さうして妾<sup>わたし</sup>が其<sup>その</sup>傍<sup>そば</sup>に貼<sup>つ</sup>いて居<sup>ゐ</sup>るんなら、ほんとに何<sup>じん</sup>様に嬉<sup>うれ</sup>しいか知<sup>し</sup>れや仕<sup>し</sup>ないわ。左<sup>さ</sup>様なれば妾<sup>わたし</sup>あ魯<sup>ろ</sup>敏<sup>びん</sup>孫<sup>そん</sup>の朋<sup>おとも</sup>友<sup>だち</sup>になるのは靡<sup>よ</sup>して終<sup>しま</sup>ふは。』

と、偽<sup>いつはり</sup>ならず悦<sup>よろこ</sup>びて云<sup>い</sup>ひ出<sup>だ</sup>したる、面<sup>おもて</sup>は晴<sup>は</sup>れやかにして月<sup>つき</sup>は雲<sup>くも</sup>なく、情<sup>こころ</sup>は優<sup>やさ</sup>しくして花<sup>はな</sup>に露<sup>つゆ</sup>あり。

されどお濱<sup>はま</sup>は又<sup>また</sup>たゞちに、

『だけれど、』

と云<sup>い</sup>ひさして祖<sup>ぢ</sup>父<sup>ふ</sup>の面<sup>おもて</sup>を見<sup>み</sup>たり。水<sup>みづ</sup>野<sup>の</sup>はお濱<sup>はま</sup>の言<sup>ことば</sup>を何<sup>なに</sup>と聞<sup>き</sup>きしや、何<sup>なに</sup>氣<sup>げ</sup>無<sup>な</sup>き風<sup>ふう</sup>に身<sup>み</sup>をも動<sup>うご</sup>かさず、ひたすらに栗<sup>くり</sup>を剥<sup>む</sup>き居<sup>ゐ</sup>たり。

## 其九

『だけれども何だエ?』

お濱の言ひ澱みたるを怪みて吉右衛門は軽く問へば、

『だけれども、何だか知らないけれども妾にやあ子エ、何様も左様なりさうも無いやうな気が自然にするのよ。五十子さんは病気が癒つたらば子、遠い遠いところへでも行つてお仕舞ひなさりさうな気がするのよ。而して其後で松ちゃんと妾とが一緒に泣くやうな事がありさうに思ふのよ。あの椎の樹の暗い蔭に、たつた二人で淋しく残つて、泣くやうな事になりさうな気がするのよ。』

と近傍關はず言ひ放ちたり。

嫩き心の前後を顧ずして、おのが胸に浮めるまゝを憚り氣も無く云ひ出したる其は、もとより取るに足らぬ空想ながら、戀に心の弱れる人には、幸先あしき如是一ト言の如何ばかり氣に障り胸に徹へやしけん

と、吉右衛門はそつと水野を見るに、幸にして今の言には別に心をも動かさざりしやうにて、猶黙々と栗を剥きつゞけ居れば、やうやく自分も安き思ひして、

『イヤ、老夫には其様な氣は仕ないよ。五十子さんが遠いところへ行つて仕舞ふなんて、そりやあ汝が魯敏孫とかの書を読んだせいで、そんな下らない事を思ひついたんだらう。老夫はまた五十子さんが癒つて、松ちやんだの、汝だの、島木さんだのと、みんなが賑やかに遊ぶ事が、あるやうに思つて居るよ。』

と老人の思ひ遣り深くも祝ひ直したり。

賢けれども猶年若ければ、言外の其意は汲みて知るに由無く、

『イ、エ、ちつとも漂流記の故ぢやあ無いわ。過日松ちやんと二人で、あの椎の樹の蔭で話を仕た其時から、何となく其様な氣が仕はじめたのよ。御爺さんこそ屹度二筋道が鼻負だから、彼の本のやうになるとばつかし考へて居るんだわ。』

とお濱が負けじ心に云ひ争ふ時、今まで傍目訝しきまで沈着に沈着き

居し水野は、

『どつちでもマア宣いぢやあ無いかお濱ちゃん！。明日の事は明日のお天道様が見せて下さるわ子。ハ、ハ、ハ。』

と悲しげにも無ければ嬉しげにも無く、もとより可笑げにもあらぬ聲して笑ひつゝ制し、又その掌の上に剥きたる栗一ツを、食べよとばかり優しく置き遣りたり。

『コレ何だ！。剥いたのを先生に戴くといふものがあるものか。』

と吉右衛門が眼の見つけて叱れるは遅く緩く、

『いゝわ子エ、先生！、戴いたつて。』

と云へる答は短く捷くして、栗は既に満面に笑を盛れるお濱が口裏に隠れたり。

されど何としけんお濱は忽地にして、其の美しき眉を顰むれば、

『いゝ氣味、いゝ氣味！。蟲が居たと見える。』

と様子を見て取つて吉右衛門は可笑がりて笑ひ崩れぬ。蟲はあらぬ筈なるを不思議の事かなと、水野は氣の毒さにお濱を打護れば、お濱は

また物を捜るが如くに水野が手先に眼を注ぎ居しが、やがて口の中の物を嘔み終ひて後、水野が手をば突然取りて、

『先生、負傷をして居てよ！。痛くなくつて。』

と示したるを見れば、左の拇指の其腹に、鮮血いさゝかにじみて臙脂微に湧けり。何に心をとられて、何時の間にか過つて傷つけて、しかも今までは知らざりけん、全く聊か此血の着きたるにお濱は栗の味を怪みたるなり。

『ア、穢い事をした悪かつた！。堪忍しておくれよお濱ちゃん。ほんと

に毫も知らなかつたのだから。』

『ナアニ毫も穢かあ無いわ。最初妾が血の着いたのをあげるなんて、縁起でも無い事を云つたから悪かつたのよ。』

瑣細の事なれど、今まで賑やかに語らひし談話の腰はこれに碎けて、何となく淋しく白けたる一室の内には、今沸り初めでも仕たるやうに鐵瓶の煮ゆる音の幽かに響き出して、静まりかへつたる村の夜の中を、澁江村との境界あたりにや狗の吠ゆるが、べうくとして遙に聞えぬ。

## 其十

水野語らず吉右衛門言はず、瞬かざる燈火の光白々と冷やかに照らすところ、お濱が眼の前に動けるものは、水野が指端を巻きたる白紙に、しれるか知れぬほどづゝじりゝくと、浸潤み出して廣がり行く鮮血の紅色のみ。

淋しさは今人々を包みぬ。べうくと鳴く狗の聲は、また遙かに遠くよりこゝに聞え來ぬ。

お濱は終に淋しさに堪へかねてや、心細けなる面色して、

『あの狗はほんとうに可厭な狗子エー。過日先生が出て行つしやつた夜も、矢張り彼の通りの聲をして、彼の見當で鳴いて居たのよ。そして其時しーんとして聞いて居たらば、妾なんだか悲あしくなつて、大變に妙な心持がしたのよ。』  
と云ひ出せば、

『また何か下らない事をいふ!。』

と吉右衛門は打消し、

『妙な心持つて、何様な心持つ?。』

と、水野は談話に話し甲斐あらしめんとの意ばかりに、問はでものこととは思ひながら問ひ返しぬ。

『あの子、疇昔子、妾がずつと小かつた時——まだ三歳四歳で、妾の眞實の御母さんが生きて居た時に子、妾がお母さんに抱かれてうとくとして居ると、遠くの遠くの方でもつて狗の鳴いたのが聞えたのよ。まあ左様いふことが有つたのだと思つて頂戴よ。そいで子エ、過日の夜あの狗の聲を聞いて思ひ出して見ると、あの狗はやつぱり其の時の狗で、あの聲もやつぱり當時の聲で、而して彼の狗の聲を聞いて、可厭に淋しいと思つた其の心持だと、思へてく仕方が無かつたのよ。』

『なんだエ、また下らない!。そりやあ氣の所爲といふものだよ。』  
吉右衛門がかく云ひ終れる時、狗はまた遙にべうくと鳴けり。

「ほーら又鳴いてよお爺さん!。氣の所爲ぢやあ無くつてよ眞實の事  
 よ!。今鳴いた彼狗は何様しても過日鳴いたのよ。過日鳴いた彼狗は  
 また妾が大變に小かつた時鳴いたのかも知れなくつてよ!。而して何  
 だか妾あ、妾の前の世といふ時にも、矢張り此様な淋しい晩に、やつ  
 ぱり彼様な狗の聲を聞いて、やつぱり妙な心持が爲たやうな氣が仕て  
 ならないのよ!。あゝ何だか妾あぞくくするやうな心持がして、變  
 に氣味が悪くなつて來て堪らないのよ。あらまた鳴くのネエ、あゝ、  
 厭だこと!。萬一すると眞實に前の世つていふものがあるかと思ふ  
 と、何だか怖いやうな氣がするのネエ。先生は前の世のあるやうな  
 心持は仕なくつて?。」  
 お濱がかく云ひたる時の其の面は、僞ならず惑を帶び怖畏を帶びて、  
 まことに前世といふものゝ空しからぬを感じて、其の恐ろしさに覺え  
 たるが如し。  
 實に思へば人は或事にあへる時、かゝる事には往時既に一度逢ひたる  
 ことのありしと、思はるゝやうなる心地の爲る事も無きにはあらぬな

り。既に兼好は幾百年の昔に、

『只今人のいふことも、目に見ゆるものも、我が心のうちも、かゝることの何時ぞや有りしかとおぼれて、いつとは思ひ出で

ねども、まさしくありし心地のする』

とは云ひたらずや。

生れぬ前の世の有無などは、もとより凡下の身の何とも知らねば、吉右衛門も横合よりは物を容れず、水野は物を思ひて猶語らざる時、ふたぐびべうくと鳴く、狗の聲は、

『我は方々の前の世より既に知りたまへる狗なるをや！』  
と告ぐるが如くに聞え來りぬ。

## 其十一

偶然ぐうぜんの事こととすればそれまでなれども、奇あやしとすれば奇あやしくもあるかな。かつて我わが讀よみし書しょの中に「幻ウイジヨンリッドルと謎めいと」といへる一章いちやうありて、其その幽怪神異ゆうくわいしんいの趣味おもむきは、骨身ほねみに沁しみて忘れ難わすく、今いまに鮮明あざやかに心頭むなごきに遺のこれる、其それをお濱はまの知しるべくはあらねど、其そのの言いふところを聞きけば、何ぞ彼かれの記しるせるところと相似あひにたるや。たゞ彼かれは考慮かんがへに老おいたる人の言葉ことばにして、これは何なんの思案しあんも無なき少女こどもの言葉ことばなり、彼かれは先まづ思おもひて後のちに狗いぬの聲こゑを聞きき、これは先まづ狗いぬの聲こゑを聞きいて後のちに思おもひ起おこせるの差異ちがひこそあれ、おのづからに此この年としゆかぬ娘この、誰だれ教をへぬにかゝる事ことを想おもひ出いだせる不思議しぎさ！。月日つきひは誰だれの所有ものとしも無なければ、仰あふぐものは皆みな其そのの光ひかりを見み眞理まことは智者ちしやの造つくれるにもあらねば、婦女童兒をんなこどもの胸むねにも浮うかみて、我われからとも無なく如かく是こゝろは悟さとれるにや。そもくまた佛陀ほとけの教法をしえに、いつとなく耳みみも心こゝろも染そまり居ゐて、それより然さる事ことをも思おもへるか。

其の因つて出でしところは兎まれ角かれ、前の世有りや將有らずや、如何にと問はれては此の我もまた、少ばかりの智慧學問の、果して有りや又無しやと蜘蛛手に働く其の下蔭に、私に前の世を有るものゝやう思ふ心地も實は爲るなり。

迷信なり、迷信なり、古き迷信なり、智慧の光輝の及ばぬ限には、其の闇さにぞ有らぬ現像の思ひ遣らるゝ、其を前の世とは云ひならはしたるならずや。さはあれど、彼の書に、

『爾見よ、此の刹那を。刹那の此の關より彼方には涯無き路の長路ぞ遙に亘れるなる。刹那の關より此方にも涯無き路の長路ぞ遙に亘れるなる。』

思へ爾、起りし事のかつて此路に起りし事ならぬやある?。思へ爾、爲されし事のかつて此路になされしならぬやある?。思へ爾、萬般の事、萬般の物、此の路に上り、此の關を過ぎざりしものやある?。

物の能く此の路に上るものは、復た必ず再度此の路に上らん。事

の能く此の關を過ぐるものは復た必ず二度此の關を過ぎん！。

やをらく、月の光に這へる此の蜘蛛！。爾思ひ得ずや此の蜘蛛の

過去既に一度世にありしとは。月の此の光！、爾思ひ得ずや月の

此の光の過去既に一度世に在りしとは。

此の關に立ちて囁きて、共に限無く究無きものにつきて囁ける

爾よ我よ我よ爾よ、爾思ひ得ずや我も爾も過去既に一度世に在

りしとは。

爾も我も、爾と我との前なる路の、長々しき迷の路に復現はれ

て、爾もふたゝび行き我もふたゝび行き、さてしも限り無く究み

無き輪廻の路に千度百度往き返らでは叶はぬにはあらずや』

とありしも思ひ出されて、水野は拭へども拭へども沸きあがる蒸氣に、

我が心の鏡の曇り果て、明らかかなり得ぬやうの心地したり。

今こゝに我には尊き今の世のあらずや。有りても可く無くても宣きは

前の世ならずや。輪廻循環の談は枝葉の事のみと、水野は強ひて思ひ

棄てんとしけるが、生憎に猶物の思はるゝを如何とも爲難くて、答へ

もせず獨り空想に耽る折しも、何をか吠ゆる彼の狗はまた、べうくと同じやうに高く鳴けり。

狗の聲は淋しさの中より起こりて淋しさの中に消えたり。水野は狗の聲の消え終りし時、ふと眼をあげてお濱を見れば、お濱もまた狗の聲の消え終りし時、物おもふ眼をあげて水野を見たり。

生れぬ前を思ひやれる眼は、生れぬ前を思へる眼と、ひたりと相會つて、はつと別れぬ。水野は忽然として、我が前の世に、我は猶今の如く、お濱は猶今のお濱の如くして、しかも我が五十子もまた今の五十子の如く、我は今と同じく苦みあくがれて、甲斐無くも長へに忌み嫌はれたりし、其の事のまざくと存りしやうに思ひて、總身の毛根動けるが如く、慄然と情無く堪へがたき心地したり。

水野の容態の常ならぬを見て、吉右衛門は急に言葉を出し、

『ハ、前の世は何様でも宣い、今夜を好く寝さへすりやあ好いのだ！。三歳や四歳の時の事を誰が知つて居るものか。前の世のあるならんぞと思ふのは、皆ほんとに氣の所爲に定つて居る。もうそんな下ら

ない事は止めて寝ると仕ましやうか。寝ると私なぞあ前の世が出て来て、いつでも若くつて、禿げて居ないで、いゝ若衆ですからおもしろい。ハ、ハ、ハ、ハ。』  
と高笑ひして一座を動かしぬ。

## 其十二

世界は紛々たり、萬馬埒の内を駈り、人間は擾々たり、群蟻碓の縁を  
回る、と君が此の冊子に書きし言葉もおもしろし、いざや、此の秋の  
氣は清み風は快ければ、家の矮きより出でゝ山の高きに登り、せめて  
は一日を埒の内より逃れ、少時は碓の縁を離れて、笑ひ傲らんもまた  
可からずやと、絶えて久しき日方八郎、友情は深き島木萬五郎、特に  
は懐かしかりし羽勝千造さへ打連れ來りて誘ふに、日頃の崩折れきつ  
たる心も、雨に會いたる早歳の草の、蘇り立つ思ひ、一議にも及ば  
ず立出でしが、天を摩し雲に冲る山嶽の景色の、雄々しく崇きを打望  
みて辿りし半途に如何は仕けん、圖らず三人とは相失ひたり。

『水野一ツ、』

と號令聲の烈しく叫べるは豪放なる我が日方の聲なり。

『オーイ、水野、』

と爽やかに喚べるは快活なる我が島木が聲なり。姿は何處とも見えざれど、聲は前途の高きにありて、後れたる我を励まし促し、來れよ、上れよ、進まざるやと、二人が心を焦立て居れるは、其聲の色にもありくくと知れたり。

草萊も無ければ、樸櫛も無く、たゞこれ圓き石塊のみなる荒涼たる山路の爪端上は、歩み行くにいと歩み辛けれど、上らで止むべき我ならんやと、水野は唇硬く引締めて、執念くも強ひて上り上りぬ。

歩めば磧礫は我が脚の下につぶやき言ふ聲をなし、頑石はまた腹黒くも我を滑らしむ。されど上らで止むべき我ならんやと、水野はつぶやける磧礫の上に冷やかに闊歩し、滑らしむる頑石の頭をしたゝかに踏み壓へて、猶執念くも強ひて上り上りぬ。

時に何處より來りしともなく丈矮く足跛へたる妖精の、其の状怪しくして、たゞ是肉の團塊ともいふべく氣味悪くも重きが、何時か我が肩頭に上り居りて、怖ろしき其の力をもて壓しに壓しつ、止まれ、止まれ、休めよ、倒れよ、地に入れよ、奈落に歿せよと云はぬばかりに、

下方へ下方へと壓しつけたり。

汝、我が魔、我が仇敵の重力の精！。汝千鈞の力をもて我を壓さば、

我また千鈞の力を以て汝に當らん。汝萬鈞の力をもて我を壓さば、我

また萬鈞の力を以て汝に當らん。汝は下さんとす、我は上らんとす。

我屈せず我撓まず、我我が努力を悋むこと無し、上らで止むべき我な

らんや、と傲然として重きに堪へつゝ、言葉をも出さねば手をも動か

さずして、水野は猶強ひて執念くも上り上りぬ。

妖精は水野が耳に貼きて、重々しき言葉の一語一語に、鉛の雫を頭腦

の奥に送り入るゝが如くに囁きて曰へらく、

『汝、水野！、おろかにも汝の思ひあがれるよ。汝、智慧の石！。汝、

おのが身を高くも高く投げ上げたる汝。されど、おろかや、投げられ

し石の、落ちて返らぬ事のいづくにかある！。おろかや汝、落ちて下

らん、今見よ落ちて降るべきなり。

汝、水野！、智慧の石！。汝、弩より飛びし石、汝天つ星を碎かんと

して飛びし石！。汝、おのが身を高くも高く投げ上げたる汝。されど、

おろかや汝、投げられし石の落ちて返らぬ事の那處にかある！。おろかや汝、落ちて降らん、今見よ落ちて降るべきなり。聞け、宣告はかくぞ、汝と汝の石を投ぐる行爲とよ。水野、汝高くも高く石を投げるよ、されど其はたゞ汝が頭の上に落ちて返らんなり。』

かく云ひ終りて言を絶ちしが、妖精は無言の恐しき力をもて、倒れよ地に、沈めよ奈落にと、いよ／＼烈しく壓しに壓せば、水野はほと／＼堪へざらんとしたり。

されど水野は更に屈せず、盤石虐げ壓すれども幽蘭死せずして、猶能く天に向つて芽を抽んづるが如く、昂々然として頭を擧げて、執念くも強ひて上り上りけるが、見れば路の邊に病める女ありて世にも痛ましく悩み伏したり。如何なる人の道行き患ひて、かゝる山路にはあるならんと、いぶかしみて不圖眼を留むれば、彼方も人ありと知つて此方を見かへりたり。見ざりし程こそ心も常なりつれ、相見ては互にハツと驚きて、彼方は面を掩ひ、我は胸を轟かす。其人は少時も忘れぬ我が五十子なれば、何として此處にはと先づ走り寄つて、慌て、扶

け起さんと其手を執れば、我が手に他の手の觸るゝや觸れぬに、彼の妖精は異様に高笑ひして、

『見よ、地より出でしものよ、地戀しきかよ。我見ん、石の落ちて那處に至るかを。』

と勝ち誇れるが如く嘲み罵る其の聲耳に徹する途端、忽地に身は鉛よりも重くなりて、大地は雪より柔かになり、見るゝ地窪み身は陥つて、蹠没れ、脛没れ、膝皿没れ、高腿没れ、腹没れ、胸没れ肩没れ行きて、石人の水に沈むが如くに、全く自ら支ふるに力無く、

『水野ツ』

と呼ぶ日方の聲、

『オーイ、オーイ、』

と喚ぶ島木が聲を遙に／＼聞きながら、次第に現世には遠ざかりて、漸く奈落の底に沈み行かんとす。今は氣も心も消え／＼になりて、思はずも南無と叫びかゝる時、駈けつけ呉れたる我が羽勝の、ムツと我が頭髮を引攪みて、鐵腕の力の恐ろしく凄じくも、ふたゝび我を光あ

る世よに飛礫つぎての如ごとく投げ上げられたるが、投げられて空そらを飛とべる身みの呀あつと驚おどろきて我われに返かへれば、これは是これも思おもひ寢ねの悪夢あくむにして、満身まんしんの汗絞あせしぼるが如ごとく、胸むねは今いま猶浪打なみうつて騒さわぎ、枕頭ちんとうの燈ひは青あおくして幽かすかに、恰あたかも鳴なり出いだせる茶ちやの室まの時計けいは、一ひとツ、二ふたツ、三みつツにして復默またもくしたり。

吉右衛門きちゑもんは眠ねむれり、お濱はまは眠ねむれり、日方ひかたも島木しまぎも將羽勝はたはがちも今いまは思おもふに睡ねむれるならん。憎にくきお澤婆さばばも睡ねむれるならん。可憫かはゆき松まつ之助のすけも睡ねむれるならん。醫いも睡ねむれるならん。看護婦かんごふも睡ねむれるならん。覺さめたるものは我われのみなるが、たゞ我わが病やまひの尊とこに惱なやめる五十子いそこは、睡ねむれりや如何いかに、穩おたやかに睡ねむれりや。

恐おそろしき夢ゆめに魘おそはれし水野みづのは、夢ゆめの根基もとひとなりし宵よひの談話はなしを獨ひとり靜しづかに思おもひ返かへして、さまざまに思おもひ亂みだるゝ折をりしも、いつまで睡ねむらで吠ほゆる彼の狗いぬなるぞや、また彼の狗いぬの聲こゑはべう／＼と聞きこえぬ。かゝる夜深よふかきに何なにを見みて吠ほえし、人ひとの魂魄たまにても飛とびたるかや、あく。

## 其十三

何となく五十子が上のあやしき氣にかゝりて、水野は睡らんとしても  
また睡られず、若や彼の人の病狀に變などありて、今を生死の瀬戸と  
苦しめるにはあらずや。此の一日は快きやうなりしが、此際數日を病  
の峠とは、尾竹も云ひたるところなれば、取り別けて心元無く思は  
るゝかな。狗の長吠する時は凶き事ありといふ俗説も、取るに足らぬ  
迷信なりとは知りながら、さし當たつて今は忌はしくぞ覺ゆる。熱の  
高きには心も亂れて、夢は駈け回る曠野の夏に、火炎と熱き息を吐き  
つゝ、清水尋ねわづらふ思に悶え、夜具に身を餘して我知らず呻く、  
其の苦しきの經驗は我も知れるが、我が五十子は今さる事もなくて、  
幸にすやすやと睡れりや如何に。安らかに病人の睡り居らば、それ  
より頼もしき好き事は無けれど、或は又ほそくと癯せし手先の、物  
あはれにも枕の端などを力草に執り絞りて、苦しさに堪へ堪へし果

ては、睡りも睡り得ず、醒めも醒めやらすなりて、ただうつらくと  
 病苦に責められ、一半は現、一半は夢、精神は幽に消えかゝりて、  
 現世冥途の境界の上に、魂魄迷へるやうにあらば、あゝ如何にせん、  
 如何にせん。おもへば何となるべき彼の人の上、我が上ぞや。前の世  
 の有りや無しや、それも知らず、後の世の有りや無しや、知らねど、  
 若し今彼の人の此の世を去らば、我が身は此世にも遺るべけれど、我  
 が魂はおのづと他に引かれて、必ず冥途に去るべければ、其の後の世  
 を思ふにつけても、此の世に我の現れ出でしは、此の世に彼の人の出  
 でしがためかと、思ひやらるゝ心地のして、遠く邈焉なる前の世にも、  
 彼の人は今と同じく病に悩み、我は今と同じく戀に泣き悲しきあり  
 さまの、ありくゝと此の心に浮び來るなり。よしや、前の世の縁の悲  
 しくもあれ、此の世の縁もまた果敢なくもあれ、眞實に前の世の存り  
 もせよかし。前の世眞實にあらば後の世もあり、其のまた後の世もあ  
 らんに、せめては其を頼みにはして、長く盡きざる我思ひの如何にか  
 成り行く涯を見ん。あゝ其につけ此につけても、如何なれば此の胸の

如<sup>かく</sup>是<sup>は</sup>騒<sup>さわ</sup>ぎて、動<sup>どう</sup>悸<sup>き</sup>の浪<sup>なみ</sup>のたゞならず打<sup>う</sup>つ事<sup>こと</sup>よ。あゝ何<sup>なん</sup>となく心<sup>こゝろ</sup>悲<sup>かな</sup>しく物<sup>もの</sup>恐<sup>おそ</sup>ろしき感<sup>おもひ</sup>のするかな。若<sup>も</sup>しくは彼<sup>か</sup>の<sup>ひと</sup>何<sup>なに</sup>とかなせるにはあらずや、居<sup>い</sup>ても立<sup>た</sup>つても心<sup>こゝろ</sup>の安<sup>やす</sup>からぬ。あゝ何<sup>なん</sup>とせん、あゝ何<sup>なん</sup>となさん。と、とつ置<sup>おい</sup>つ思<sup>おも</sup>ひ迷<sup>まよ</sup>ひしが、此<sup>こゝ</sup>處<sup>ち</sup>にありて空<sup>あだ</sup>に悶<sup>もだ</sup>えんよりは、其<sup>そこ</sup>處<sup>ち</sup>に至<sup>いた</sup>りて、狀<sup>ありさま</sup>態<sup>うか</sup>を伺<sup>うか</sup>はんと、終<sup>つひ</sup>に衣<sup>い</sup>をかへて立<sup>た</sup>ち出<sup>いで</sup>でたり。風<sup>かぜ</sup>も眠<sup>ねむ</sup>れり、石<sup>いし</sup>も眠<sup>ねむ</sup>れり。誰<sup>だれ</sup>かかゝる時<sup>とき</sup>戸<sup>と</sup>外<sup>がは</sup>に在<sup>あ</sup>らんや。戸<sup>と</sup>締<sup>しま</sup>りの如<sup>い</sup>何<sup>か</sup>にすべきも打<sup>うち</sup>忘<sup>わす</sup>れて、ふらくと立<sup>た</sup>ち出<sup>いで</sup>でたる水<sup>みづ</sup>野<sup>の</sup>の道<sup>みち</sup>行<sup>ゆ</sup>く様<sup>やう</sup>子は、たとへば影<sup>かげ</sup>のみの人の如<sup>ごと</sup>く、現<sup>このよ</sup>世<sup>よ</sup>のものとも思<sup>おも</sup>はれざりしが、水<sup>みづ</sup>野<sup>の</sup>も既<sup>すで</sup>に此<sup>このよ</sup>世<sup>よ</sup>を忘<sup>わす</sup>れて、空<sup>そら</sup>は今<sup>いま</sup>曇<sup>くも</sup>れりや星<sup>ほし</sup>ありや、闇<sup>やみ</sup>なりや、將<sup>はた</sup>月<sup>つき</sup>ありやも、全<sup>ま</sup>く心<sup>こゝろ</sup>には留<sup>とど</sup>めざるなりけり。

## 其十四

戸とに尾しり栓さしせで濟すむ村居そんきまの心安こころやすさに慣なれたりとは云いへ、所以ゆゑ知らぬ  
 動悸むなざわぎの烈はげしさに其その人の氣きづかはしくて堪たえ兼かねたりとは云いへ、時ときなら  
 ぬに飄ふらり然たちいと立出みづのでし水野ふるまひの振舞ひごろは、日頃ににも似にぬ仕業しわざなりしが、老おいの  
 眼敏めざとき吉右衛門きちゑもんは、先刻さきより水野みづのが思おもひあまりて、我知われしらず長吁短歎ちやうくたん  
 する其その聲こゑを聞ききて既すでに覺さめ居をりつ、如何いかばかり戀こひの山路やまちの嶮けはしきに  
 惱なやんで、若わかき人ひとの可あたらし心こころを傷きづつけ血ちを流ながす事ことぞやと、ひそかに憐あわれみ居あ  
 たりしかば、ごとくと雨戸あまど引き明あけて外そとに出いづるをも、一度ひとたびは咎とがめ  
 んとしたれど思おもひ返かへして咎とがめず、大方おほかたは病やめる人ひとの上うへの氣きにかゝりて、  
 其その様子ようす見みにと行ゆくならんを、たゞ心儘こころまならしめんこそ慈悲なみさけなるべけ  
 れと、睡ねむるを装よそほひて咳嗽しかせきもせざりけれど、はや水野みづのが四五間しごけんも遠とほく  
 去さりしと覺おぼしき頃ころ、吉右衛門きちゑもんは別べつに吉右衛門きちゑもんの思おもふところありてや、  
 吾わが傍かたはらの床とこに臥ふしたるお濱はまの寢顔ねがほの、小こさき洋燈らんぶの光ひかりに照てらし出いだされ

たる、罪も無く美しきを見て、軽く歎じたり。

水野は覺めながら夢路を辿るがごとく、天に明無く地に色無き中を、何者にか肝膽に糸つけて牽かるゝやうなる云ひがたき恐ろしさ苦しさを覺えつゝ、例のお澤が家の前にさしかゝりたり。心に眼あればこそ物は見ゆれど、眼に力は無くして知らぬ相は見えぬ黑暗々たる眞の闇に、水野は歩をとゞめ眼を凝らして窺へば、豫て知れる彼の寒竹の藪疊の開けたる間より、圃の先に當りて屋の棟の低きが、曇れる空に微に透きて立てり。

記憶あればこそ辛くも歩かるゝなれ、地の底の磐の内にも入らばかくもアランかと思はるゝ闇の中を、心あてばかりに此方と進み行きて、漸く草屋の横を過らんとする時、萬籟死し盡せる今突然として、

『ぎりぎりッ、ぎりぎりッ。』

といふ怪しき響したり。

鳥にあらず鼠にあらぬ其の音の、¥ル何とも云へず物忌はしきに、思はず慄然として耳を立つれば、聲は我近き荒れたる家の内より來りて、

そもく何の夢にか怒れる、彼の鬼の如きお澤婆の、笑顔に見てさへも凄しく今猶残れる彼のまばらなる長き其齒を咬み鳴らせるにて、其音につゞいて又更に、

『ウーン、ウーン。』

と寐唸りする其聲は恨むが如く詛ふが如く、満腔の怨毒を噴き出して、闇きに遊行するあらゆる悪鬼を喚び集へんとするにも似たれば、水野は彊が上にも心悪くおぼえて、止めよかし、止めよかし、と急に念じたれど、

『ぎりぎりッ、ぎりぎりッ。ウーン、ウーン。』

といふ聲は執念くも起つて、我が脳後に襲ひかゝるがごとく逼るに、身も世もあらず厭はしく思ひて、追はれ心地に歩み去らんとする折しも、忽ち我が五十子の家の其の方より、ひらりと物の光りの此方に射し來りたり。

## 其十五

漆と黒き眼前の闇に、ぱつと一ト刷毛の光線の散つたるを、いづくよ  
りぞと水野は見れば、人の歸るを送り出すと見えて、五十子が家の戸  
の今引開けられたる其處より洋燈の光の晃然と射したるなり。

問はでも知るべし、病者ある家を、如是時刻に人の出入りする事、必  
ず凶ありて吉ある事無し。我が五十子は抑如何にかしたる。何と無く  
堪へ難き心地の爲て、我が此處まで獨り迷ひ出で來しも、世にいふ蟲  
の知らせしといふ事か、たゞならず動悸の打ちしも思ひ當たりたりと、  
先づ胸を轟かして彼方を見るに、やがて戸はまた引寄せられて、遠目  
の定かならねど四ツ目菱の紋つきたる提灯を片手に、片手には小き  
革靴を持ちて、ぼくくくと此方に歩み來れるは疑もなく尾竹なり。

さてはいよく、五十子に變のありて、夜半の扉をたき招び迎へたれ  
ばこそ、尾竹の先刻に來りて今歸るなるべけれ。歸るは吉くてか將凶

くて歎。嗚呼、五十子の病は測るべからずして、尾竹の技倆は我よく  
 知れり。嗚呼、人の命！、定まりたる天の數は今見ゆるかや！。他を  
 も死なせし、我も死なじと、一念の火を燃やしとも空となつて、他も  
 死に、我も死に果てゝ、冷たき灰となるべき時の、終に眼の前には來  
 りたるかや。前世も知らず、後世も知らねど、此の今の世は、これま  
 でなりや、嗚呼残り多くも恨多くも、これまでなりや、これまでなり  
 や。と歩まん意も無く言はん意も無くなりて、水野は地の上にとゞ苟  
 且に立て置かれたる一つ杭の如く、少時茫然として立ち居けるが、や  
 がてぼたりと倒れんとしたり。

されど水野の自ら支へて、辛くも思を轉じたる時、尾竹は間近く進み  
 來りしが、思ひもかけぬ闇の眞中に人の佇めるを認めつ愕然として驚  
 き、提灯の燈に此方をすかし見、

『み、み、水野さんですか。』

と顫へ聲に尋ねたり。

凡人の眼つき、凡人の口つき、凡人の額、凡人の肩、身長も普通なれ

ば、態度も普通にて、何處に一つこれといふところも無き其の尾竹の深くも恐怖に魘はれたるにや、眉を尾下りにし、眼を壺深くして、頸を縮めつ、此方を見たる其の怯れたる状のいと醜きが、提灯の火影にぼつと見えたるは、今といふ今のみ始めて平凡ならず水野が眼に映りぬ。

## 其十六

尾竹の聲は闇の寂寥に響きて、愚しくいと大きく聞えたるに、水野は何となく厭はしく感じつ、こゝにて又我と此男との問ひつ答へつせば、其の聲の彼家の人々にも聞えんことを忌はしく思ひて、言葉は無き舉動ばかりに尾竹を誘ひ、突と外の方に去らんとすれば、尾竹は慌て、先に立つて、手に持てる提灯に足元を照らしたり。

共に歩むこと四五歩ならずして、彼のお澤婆が家の内より、

『ギリギリッ。』

といふ聲先づ聞えて、次いで、

『ウーンウーン。』

といふ寝唸りの聞ゆれば、尾竹は思はずもピクリと顫へて、手にしたる提灯に烈しき浪を打たせつ、

『ナ、何でしやう彼の音は？』

と振り返つて水野に尋ねたり。

されど水野は尾竹が此の言葉を、閑事なりと云はぬばかりに、たゞ無言をもてあしらひ棄て、おのが歩まんとする方に歩み去りながら、

『岩崎は何様でございます、よろしいのですか?。』

と先刻より此の醫の様子に大事無しとは察したれど、問はんとして一刻も忘れざりし問を發すれば、眞情餘りし其の言葉の自然と威あるやうなるに尾竹は壓されて、今我が口に出したる問の答を得ざるをも、また水野が如何なれば如是時分に此邊には佇み居たるやと尋ねまほしく思ひ居たるをも盡く皆忘れ果て、

『いや御尋問が無くても夜でも明けましたら一寸上つてなりと申上げやうと思つて居りましたが、看護婦の注意からして御使があつたので、今しがた出て見ると、實は甚だ面白く無くなつて居るのです。勿論今が今といふやうなことはありませんが、全體が丈夫づくりといふ方では無いのですに、たゞ氣性が確乎として居らるゝばかりで、今までは病苦に負けずに居られたところ、何様して、精神作用だつて限のあ

るものですもの、連日の高度の熱では耐りません、とう／＼堪へに堪へきれなくなりましたのです。さあ左様なると其と同時に、自然と来て居た衰弱が、俄然と外に現れてまゐりましたので、一體に何處も彼處も悪くなつて来たといふやうな譯です。しかし幸特に肺が悪くなつたとか心臓が悪くなつたとか云うのではありませんから、まだ／＼十分有望なので、云はゞ彼様いふ大病にかゝつた患者の、何様も經過しなればならぬ已むを得ざる場合なのです。』

と一半は水野を慰め、一半はおのれを辯護するが如く、素人解りすべきことを條理賢く述べたり。

水野は五十子の容態あし、と聞きて、さてこそと胸を躍らせつ、先ず悲しくも腹立たしきおもひして、はや苛々と心は烈しくなり、此の醫者の技鈍きを怒るとにはあらねど、其の言葉巧なるが小憎らしくて、『已むを得ざる場合で！。成程御道理です、已むを得ざる場合で！。まかり間違つて何様なりまして、勿論みんな已むを得ざる場合ですナ。』

と、一ト當當つれば尾竹は驚き、平日は物柔かにして斯様は無かりし人の、何たる氣の焦れかたぞやと呆れながら、

『左様御取りになつては困ります。わたくしが責任を逃れやうとして申したのではござりません。わたくしが其様なもので無いことは御承知でござりましやう。小生は小生の及ぶ限りの力を盡して居りますのです。』

と疾辨に言ひたる其聲は眞に切なげに泣きさうにも聞えて、技こそ庸常にして人に挺でもせざれ、心は正直にして自ら欺かざる君子なるを示せり。

水野は流石にこれに氣の毒になりて、

『や、先生、御氣に御留めなすつてはいけません。先生の御誠實な事はよく存じて居ります。猶此上とも何分御願ひ申ます。』

と和らかに云へば、

『左様仰あつて下さればまことに満足でございます。如何様にも此上猶盡力を辭しませぬ。併しなかくの重體の事ですから、先日せんじつの學士がくしに

も御見せになつては?、』

と腹の底に毒無き人の、はや胸もともにも蟠りなき挨拶なり。

『非常に悪い方へ進みまして?。』

『いや、今いけないといふのでは無いのですが、何様も前申した通りで

すから相良さんにも………如何にも衰弱が急に甚く現れて來ました

から。』

と聞くや否や水野は心中に疑ひて、衰弱は漸々にこそ來るべきなれ、

急に甚く現るゝものにや、醫ならねば我知らねど、と一度は迷ひしが、

惑ひて益無ければ、一瞬に其の心を決して、

『勿論直に來て診て貰ひましやう。』

と云ひ終わつて一禮するかと見えしが、忽ち其姿は闇に隠れて眞黒の

中に走せ去れば、尾竹は提灯を手にしたるまゝ、うつかりと路央に獨

り立つて、黒白なき暗さに水野の下駄の音の、早くも隔たり行く方を

見えもせぬに永く見送りたり。

## 其十七

一度あることは二度ありといふ世の諺の人を欺かず、水野はふたゝび  
熬りつくが如き憂を抱いて南方に走りけるが、闇夜の道の抄取らずし  
て、その相良が家を訪ひし時は既に遅く、舎の内はまだ燈火無くては  
の頃ながら、戸外は既人顔定かなるほどになりて、かつて島木の寓よ  
り歸るさに訪ひし時と同じほどの明るさとはなり居たり。

たゞかれて怒らぬものは醫師の家と、憚りも無く打敲けば、思ひのほ  
かに早く返事して、立出でたるは前の日窘めやりたる彼の盤臺面の書  
生なり。我を侮りがたき男と思ひ込みてや挨拶も慇懃に愛想よけれ  
ば、おのづから物も云ひ易くて、わざぐゝ來れる所以を手短に述べ、  
さて先生の御來診をと乞へば、書生は困りきつたる顔つきして、

『實は先生はたつた今出て行かれたのです、やはり病家の急の迎へを受  
けられて。しかし行かれた先が餘計遠いところでもありませんから、

二時間も立つ中には歸らるゝでしやう。歸られたら必ず左様申しまして、屹度回診になる様に致しましやう。』

と云ひ終りしが、水野が面に難色あるを見て、

『勿論先生の歸らるゝまで、此處に御待なすつていらしつて、御直接に御頼みなさるとも其は御随意です。』

と云ひ足したるは、よくよく此の意地強き客の執念きに凝りて、ふたゝび前の日の如く其の怒りを惹く事などの無からんやうにと、勉強意を用ゐたりと見えたり。

書生の言へるところは全く偽ならず見ゆるに、世に行はるゝ醫の忙しくして暇無きは如何ともすべからざることながら差當つて今を何とせんと、水野は礎と行き詰りて、あたかも帆船に舵を失ひ、奔車に轄を抜かれるごとく、言はんかた無き心細さを覺えて、惘然として言も無く物を思ひたり。

書生は水野の容子を見て氣の毒さに堪へでや、

『遠路のところを御來臨になつたのに生憎で、如何にも御氣の毒でござ

いますが、必ず小生は左様申しまして、是非とも回診になるやうに致  
 します。時間のところは兎に角、必ず診てあげますことは診てあげ  
 ますやう、これは小生が御受合申して左様いたしますから。』  
 と、前の日とは打つて變つて親切に言ひ呉るゝ、その言葉には力あ  
 り、その様子には勢あるに、今は此の男を頼まんより他の道なければ、  
 水野はいと懇切に頼み聞えて、是非無くも元來し道へ引返したり。  
 戀人の病は前の日より凶きかたへ進めるなり、頼む醫は他に出で、家  
 にあらぬなり、夢見は忌はしかりしなり、胸は騒ぎしなり、若やと思  
 ひしことは不思議にも中りしなり、弱りかへれる五十子に一應の手當  
 して歸れる尾竹よりは心にかゝる言を聞きしなり、氣味あしき狗は前  
 表かとおぼしく吠えに吠えしなり、無心のお濱は我が五十子の遠方へ  
 行かんことを無心に云へるなり、氣にかゝることのみの何ぞ多きやと、  
 水野は此等の事を思ひつゞけつゝ、恰も前の日と同じ曉の、今日が風  
 無くて曇り空の少し闇きのみが異なる同じ時刻に、同じく人通り猶少  
 き並木の道を首を垂れて力無く行き盡しつゝ、吾妻橋の方に去らんとす

る時、突然として人の我が手を執るありて、しかも執られし我が手首  
に、ざらりと物の觸りたれば、何ぞと驚きて顧みるに、骨露に萎び枯  
びて冷き細き手に我が手は捉へ居られて、其の手首に掛けられ居たる  
黒き木の數珠の我が手に滑りて落ちかゝれるなり。

## 其十八

『あなた!。いけません、いけません、信を御冷ましなすつては!。此處を御通りになさりながら、御参詣もなさらないなんて、第一勿體無い事ではございせんか、さあ、御一緒に詣りましょう』

と遮に無に我が手を牽きに牽くは、過し日淺草寺の御堂に普門品を誦して、我と共に痛く書生に罵られたる、彼の頭髮薄く額脱け上がりて鼻細き貧相の老人なり。

一樹の蔭に憩ひ一河の流れを掬ぶも他生の縁といへば、まして一堂の内と同じ御佛を頼み奉りて、しかも假初ながら言葉をさへ交したる中なれば、呼びかけられたりとして怪しうはあらぬながら、手を執りて我を伴はんとする舉動の、馴れくしきに過ぎたるやうにも思はるゝに、水野は一度は之を異みしが、たゞくおのが信心の同行とせんとするほかには、何の念も無かるべき其の道理らしく眞面目らしき顔の他事

無く正直氣なる様子を見ては、何の故とは無けれど此の老いたる人の意に背かん氣にはなれずして、引かるゝが儘に無言に従ひ行けり。

『世が澆季になつて居りますのですもの、御同様に鄙しい心ばかりが先に立まして、兎角信心の起らないのも是非がございませんで、眞に淺ましい口惜しいことでもございます。もう五六十になりまして、いろ／＼の經驗を積んでまゐりました私等のやうな年齢のものでさへ、何ぞにつけても怒つたり泣いたり致しまして、彼奴が憎いの恨めしいのと、詰らない修羅を燃やしまして、信心氣一方にばかりにはなつて居られませんのですから、御若い貴君方ではなかく、何様いたしましたして、幾許御發明でいらつしやいまして、何事も佛陀様に御任せなすつて安心して御在なさるといふ譯にはまいりますまい、御信心も自然御冷になつて、他の方へ御紛れなさるのも御無理はございませぬ!。併し貴君はまあ御頼もしい方で、今の御若い方にも御似合ひなさらずに、一心になつて御信心なすつた過日の御殊勝さには、つくづく私にも感心いたしましたして、斯様申しては諛辭のやうでをかしうございませぬが、

宅へ歸りましてからも、あく未だ世の中は闇にはならない、あくいふ  
 若い方も稀には居らつしやる！、考へて見れば自分なんぞは罪障が深  
 くつて昔生れの身でありながら、何十年といふものを惜しい欲しいの  
 欲ばかりに過して、夢のやうにたゞ暮した末、神様佛様の有り難いこ  
 とを知つたのも、やつと此の四五年ばかり以來の事だつたが、御若い  
 のに彼様いふ良い方もある！。自分の彼の位の齡の時に比べてもよく  
 解ること、二十四五や三十前後の勢では、鬼が出て攫み合はうとい  
 ふ盲元氣で、神様も佛様もありは仕ないのに、彼の方は嘘では出ない  
 涙を溢して、一心になつて祈つていらつしやる！。御父様が御病患  
 でももあるか、御母様が御悪いのか、それとも何様いふ事で思ひ餘つ  
 て、丹精を御凝らしなさるか知らなければ、あの御年齢で既神佛  
 の有難い事を知つて居られるのは、あゝ稀らしい殊勝なかつた、眞  
 實に貴君の事ばかり思つて居りまして、何だか私は急に一人の、私  
 の味方が出來たやうな氣が致し、これも觀音様の御引合せ下すつた菩  
 提の同行とでもいふのであらう！、と勝手な考へではございますが思

ひ詰めまして、明朝御目にかゝつたらば、も一度御話して見やう、老  
 人の事ゆゑ御嫌ひなさるか知れないが、どうも御話を仕て見たらば、  
 屹度私の力になつて下さる俵氣の方だらう、といふやうな心持が仕  
 てなりませんでした。ところが明朝參つて見ると御參詣はありませ  
 ん、その次の日も御參詣がありません。ぼろりくと涙を落として眞  
 になつて何事かを願つて居られた彼の方が、不信心になられる理由は  
 無いが、あく何といつても未だ御若い！、下らない悪魔外道の馬鹿書  
 生が、愚につかない事を饒舌つて居たが、若や彼言が毒になりは仕な  
 いか按じられる、何といつても未だ御若いから！、と大きに彼の書生  
 等を憎くおもつて居りました。』

## 其十九

「何様致しまして、貴君、悪所へ参りました歸路に遠慮を致すことも存  
じませんで神社佛閣の境内へ入りますやうな不心得なものに、何が一  
つ満足に世の中の事が解りましやう。みんな彼の先日の書生の連中  
は、自分の身體の背後から親や兄の氣息が掛つて居ればこそ高慢な口  
を利きましても人が赦して置いて呉れるのだといふ事も知りません  
で、定りきつた譚語を申しますが、畢竟彼様いふのは、親や兄の有  
り難い事さへ解つて居りませんのですもの、中々神佛の有り難い事な  
んぞの解らないのも、些も無理はないのでございます。それでも當世  
のものゝ事でございますから、理屈は立ちさうなやうな理屈臭いこと  
を、曲りなりに牽強て申しますので、一寸聞けば道理なやうなにも思  
はれます。そこで穏和いものまで巻き込まれて、やれ神様を敬ふ  
のは愚迷だの、佛様を崇めるのは卑劣だのと、傍から始終云はれつけ

ますと、矢張やつぱりいつか其氣そのきになつて、其實そのじつ神様佛様を頼たのみたいやうな氣きのすることは有あつても、神様佛様をいぢりまはすのが、何なんだか意氣地いよくちの無いやうな羞はづかしいやうな氣きが仕して、それで神様にも佛様にも、お絶絶対り申まをさないで一人ひとりで下くだらなく苦くるみきつて居をります。それが當世たうせいの一體いつたいの風ふうでございます。それにまた何なんとか彼かとか云いはれて居ゐらつしやる先せん生方せいがたでも、正直しやうぢきな方かたや良い方かたばかり有ありはしません。随分ずぶんわざと若いものものの氣きに入るやうな事ことを仰おつしたり人ひとを吃驚びつくりさせるやうな事ことを仰おつしたり、中なかには評判ひやうばんを取とらうの目論見もくろみやら、面白おもしろづくの好奇心ものずきやらから、神かみも佛ほとけも耶蘇やそもいけない、酒さけを飲のんで管くだを巻まいているのが一番好いちばんい、女をんなと戯ふざけてゐるのが何なんよりだといふやうな大變たいへんな事ことなんぞを仰おつしある方かたもあるさうで、左様さうで無なくつてさへ暴あばれたがる若いわかいものが、其様そのんな事ことを聞きくのですから堪たまつたものではありません、蝮まむしを食くつた軍鶏しやものやうに氣きばかり強つよくなつて、世界せかいは何なんでも勝手かたの仕勝しがちだと思おもひまして、相手あいてさへ見みりやあ雞距けつめを打うち込みたがります。過日このあひだの書生しよせいなどが其例それでござりまして、吾家わたくしどもにも一人ひとり、似にたり寄よつたりの難物なんぶつがござりま

する。かういふ世間せけんでござりまするのに、たま〜貴君あなたのやうな方を  
 お見受け申まをしたのですから、失禮しつれいながら御同年位ごとうねんくらひの吾家の豚兒うちのぶたごめと思  
 ひ較あはすにつけ、ほんとに御懷おなつかしく存ぞんじましたが、其その貴君あなたが其限それきり御  
 見えになりませんので大變氣たいへんきになつてなりませんでした。御若おわかいから  
 彼の書生あしよせいの云いつた事ことなんぞも御耳おみみに可厭いやでしたらうが、御迷おまよひなすつ  
 てはいけません。氣きになすつてはいけません。御信心ごしんくさへ御續おつづけなさ  
 れば御利益ごりやくは分わかつて來きます。私わたくしなども二三十年にさんじゅうねんも前は矢張やつぱり彼の書生あしよせい  
 でございましたから、彼の書生あしよせいも二十年三十年にじゅうねんさんじゅうねん経たちましたら、私わたくしにな  
 りまして、御利益ごりやくの力が身みに沁しみるやうになりましたやう。一つ家ひとやの婆ばあ  
 さんだつて發起ほつき致しますのですもの、何年なんねん洋杖すてつきを振り廻まはして威張ゐばつて  
 居ゐられるものでございませうやう?。虚言うそや偽言いつはりは申まをしません、私等わたくしら  
 は散々さんぐん世よの中の憂うれい辛いつらいの川かはを越こして參まゐつて、此岸こちらの信心しんくの有あり難がたい  
 事こと好こい事ことを見みて居をりまするので、彼等あれらは未だ川かはの中なかへ入はいり立たてな  
 元氣げんき任せまかに立泳たちおよぎを爲したり拔手ぬきでをきつたりしなから、何だ對なんひかふ岸ぎしに上あが  
 つて居ゐる奴等やつらの意氣地いくぢの無なさと申まをして居ゐるやうなものでございます。

疲勞くたひれたり、こむらが反かへつたり、流れの強つよいところへ出でたりしますれば、此方こちからの岸きしを見て泣なかずに居をりません。其時そのときになつて前まへに此方こちからに居あたものゝ心持こころもちが解わかります。あれ彼の銀杏ぎんなんといふものは公孫樹いてふの實みです。榧かやの實みでも無なければ又また橡とちの實みでも無なく、誰だれが何なんといつても公孫樹いの實みです。これに理屈りくつが何なに有ありましよう、もと／＼公孫樹いから出でたものですもの！。神様佛様かみさまほとけさまに縋すがる私わたくしの心こころは、何なんの心こころでござりましよう！、人ひとの心こころです。禽とりの心こころでも無なければ獸けものの心こころでも無なく、誰だれが何なんといつても人ひとの心こころです。これに理屈りくつが何なに有ありましよう、もと／＼人ひとが有もつた心こころですもの！。吾わが子この可愛かほゆいのに理屈りくつも無なく、思おもふ人ひとの大切だいじなのなに理屈りくつも無なければ、神様佛様かみさまほとけさまに御お縋すがり申まをすのに、何なんの理屈りくつも無ないけれど、それも眞實まことなれば此これも眞實まことで、理屈りくつも要いらないほどの眞實まことです！。あゝ、いけません御迷おまよひなすつては！。いや御迷おまよひなすつてはいけません貴方あなた！。公孫樹いの秋あきには銀杏ぎんなんが生なります、榧かやの實みも橡とちの實みも生なりは仕しません、人ひとの胸むねには信心しんじんが生なります、生ならせまいと思おもつても生なるのが約束やくそく、信しんを有もたなければ胸むねが騒さわいで、誰だれが氣きを安やすくして居あ

られましやう！。お、貴君あなたが黙だまつて居ゐらつしやるので私わたくしばかり饒舌しゃべり  
ました。さあ御堂おだうへ上あがつて拜をがみましやう。

と水野みづのを牽ひきて共に堂だうに上のぼりぬ。

老人らうじんが言ことばを黙々もくくとして聞ききながら、水野みづのは牽ひかるゝがまゝに堂だうには上のぼ  
りしが、猶なほ今朝けさは直ただちに本尊ほんぞんを拜はいせんともせず、さればとて侮あなどり慢あなどる心こゝろ  
も無なくて、喪心さうしんせる人の如ごとく無意味むいみに立たち居ゐたり。

## 其二十

既に我が言葉ことばを候もときもせず、また我が伴ともふを拒こぼみもせねば、今御いま
 堂だうに上のぼりて御前おんまへに至いたれる上うへは、必かならず復前またさきの日ひの朝あさの如ごとくに、た
 とひ御經おんきやうは誦じゆせざるまでも、掌たなぞこを合あはせ頭かうべを下さげて禮拜らいはいするなら
 んと、獨合ひとりがてん點てんしてや彼かの老人らうじんは、御堂みだうに上のぼりてよりは水野みづのに關かま
 ず、一ひとつは自己おのが信心しんくの誠まことを致いたさんとするに忙いそしが故ゆえもあるべ
 し、例いづもの如ごとく御前みまへに蹲うづくまりて、先まず一心いっしんに恭敬きやうけい禮拜らいはいしつ、徐々じゆかに
 妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五めうほうれんげきやうくわんぜおんぼさつふもんほんだいにじうご、と老おいたる聲こゑの低ひくく誦じゆし出いだ
 けり。

朝あさの氣きは何なんとなく心こころをして肅然しゆくぜんたらしめて、廣ひろき御堂みだうの内うちの人ひと無なき物もの
 静しづかさは自然おのづと胸むねの中うちを清すがく々すかしからしむ。今日けふは御佛みほとけを拜をかみ奉たてまつりもせ
 ず、さりとて又御佛またみほとけより反そむき去さりもせず、たゞただ從順すなはなる兒童こどもの、
 心こころに物もの無なきが如ごとく、牽ひかれたるまゝに此處こゝに來きたりて、此處こゝに其儘そのまゝ止とま

る水野は、身近なりし圓柱の太きに憑りて、風吹かぬ間を大空に高く  
 懸れる孤雲の、何に着くとも無き思に、嗒焉として獨り空しく立てり。  
 老いたる人の誦する經の、其意は曉らる、時あれど、其聲は波瀾無く  
 やまな山坂無くして一條の糸を畫けるにも似て平らかなるに、聞き居る我が  
 心は刻々に安まり行き、何とは無けれど引き入れらるゝやうにおぼえ  
 て、知らず識らず無念無想の境に入る折しも、人の下駄の音に不圖驚  
 きて、見れば何時の間にや三十ばかりなる女の、老人と並びて禮拜な  
 し居り、老人の誦經は今や終らんとして、具一切功德、慈眼視衆生と、  
 偈の末のところを誦み居たり。是は不覺なりし愚なりし！。身はこそ  
 動かさざりつれ心の内には、吾が兒の可憐いのに理屈も無く、思ふ人  
 の大切なのに理屈も無ければ、神様佛様に御縋り申すのにも、何の理  
 屈も無いなれど、それも眞實なれば、此も眞實で、理屈の要らないほ  
 どの眞實！と云ひたる此の老人の言葉を味はひて、實に云はるれば、  
 其の如くなり、我が彼の人を思ひ思ふ心に、そもく何の理由のあり  
 や、何の理由とは我も知らず、たゞ我と我が欺き難き情の萌えに萌え

出づるを抑へ得ざるぞ眞實なる！。思ふて思はるゝ身ならばこそ、不  
 運にして我拙く生れ來て、思へば思ふほど嫌はるゝ身の、思ふて甲斐  
 無き事なれば、自ら斷念め思ひ切りて、忘れ果てんこそ人のため身の  
 ためなれ、我が爲す事言う事は何から何まで、情なくも彼の人に厭は  
 るゝながら、思ひ忘るゝといふ此事ばかりは、必ず彼の人に悦ばるけ  
 れば、果敢なく悲しき限りなれど、とてもかくても味氣無き我が一生  
 の思ひ出に、せめては男兒らしうふつとりと諦めて、うるさく纏繞る  
 蔦葛の離れて去りし嬉しさよと、彼の人に安き思をさせん、人も見ず  
 人をも見ざる深き山の巖の罅隙に我一人入りて、誰憚らず思ふさま泣  
 きて、其涙の乾き聲の枯れん時我即ち此世を去らば濟むべき事なる  
 をや！、と幾度かく思ひしかど、諦めても諦めても諦め得ず、彼の  
 人を背後にして千里の遠きに身を隠し棄てんとする意はありても、彼  
 の人より距たらんとすれば一步も去り得ず、我が心の我が心に任せず  
 して、あだに苦みあだに悩むは、たゞ我と我が欺きがたき情の萌えに  
 萌ゆればなり。おもへば神佛を頼み奉るも實に似たる事かな。人はい

ざ知らず我は我が欺き難き情のありて、何の理由とは更に知らねど、  
神にも憐れと思はれたき心地のするなり。理は石の如し狂ぐべから  
ず、我これを懷きて神をも佛をも肯はねども、感情は味の欺くべから  
ざるが如く、我おのづからに神を戀ひ佛を慕はんとするを如何にすべ  
きや。人の戀しき彼も眞實なり、神佛の頼み奉りたき此も眞實なり。  
噫我力無し、我既に我が五十子を思ひ棄て得ざるなり、我よくこの  
神佛をば思ひ棄て得べきや。思へば我ながら覺束無き事なるかな！。  
さはさりながら、さはさりながら。と切に黙想に耽りし時には、弘誓  
深如海、歴劫不思議と老人の誦したる聲を猶耳にしたりしに、それよ  
り兎せん角せんに思ひ迷へる中、何時の間にか蒼然と睡眠には入りた  
るぞや。と水野は自ら私に慚ぢたり。

## 其二十一

右せんとすれば左したき意あり、左せんとすれば右せんとしたき意も  
 ありて、廣野の草高き中の岐路にさしかまゐれる身の、いづれと取りわ  
 づらへば、右にも去り得ず左にも往き得ざる一時二念の心魂は疲れて、  
 我知らず誦經の聲の中に攝し去られ、睡るとも無しに睡りし歟、否睡  
 りしか睡らざりし歟。たゞ我深く思ひ入りて、いよく二つの念  
 の力相等しくして、我が心のいづれにも動かずなりし其の静さを纒に  
 おぼえし後は、聞くとも無く聞ける老人の聲の、いと快く聞はしを知  
 れるのみなりしが、兎にも角にも我を忘れしは愚なりしと、水野は繰  
 り返して自ら思ふ時、阿耨多羅三藐三菩提心と、誦し終りて一心に禮  
 拜せし彼の老人は、去らず就かず立迷へる水野が状態を頭を反して  
 見つ、たちまち此方へすたくと來りて、眼の中に氣遣ふが如く憐む  
 が如き色を浮めながら、

『あゝ御迷ひなすつてはいけません、勿體無い事です！。念念に疑を生ずる勿れとは御經にもございます。貴君過日は泣いて居らしたではありませんか、貴君のやうな良い方が、御迷ひなさるなんて飛でもない事です！。信を籠めて一心に御拜みなさならなくつてはいけません、善惡共に御利益は屹度あります、さあ私も拜みます、御一緒に拜みましやう！。さあ、貴君、さあ！。』

と云ひく袖を引き御前へと誘ひ、おのれ先づ膝を折り身を屈めて禮拜し、水野にも之に倣はしめたり。

他人の胸の中には何物ありとも思はず、たゞ我が菩提の同行と思ふばかりの親切より、年若き我をあらぬ道へ外れさせじとの他事なき願望に、人の好げなる此の老人の如是心を使ひ身を使ひて老實しく振舞ひ呉るゝを見ては、心弱くも人悪しからぬ水野はこれを拒みかねて、牽かるゝがまゝに牽かれ、屈ませらるゝがまゝに屈み、終には御佛の前に蹲まりて、其の老人の爲すが如くに、一霎時は頭を下げ眼を瞑きて、一心に大慈大悲の我が菩薩をば、我を忘れて念じ奉りしが、佛力甚深

測<sup>はか</sup>るべからず、時<sup>とき</sup>に不思議<sup>ふしぎ</sup>や水野<sup>みづの</sup>は忽<sup>たちま</sup>ち、心<sup>こゝろ</sup>の闇<sup>やみ</sup>に朝日<sup>あさひ</sup>の射<sup>さ</sup>して、胸<sup>むね</sup>  
 の氷<sup>こほり</sup>の春風<sup>はるかぜ</sup>に逢<sup>あ</sup>へるが如<sup>ごと</sup>き思<sup>おも</sup>ひの仕<sup>し</sup>つ、其<sup>そ</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>を問<sup>と</sup>ふ暇<sup>いとま</sup>も無<sup>な</sup>く、今<sup>いま</sup>ま  
 で知<sup>し</sup>らざりし慰<sup>やすら</sup>安<sup>かさ</sup>を得<sup>え</sup>て、何<sup>なん</sup>とは無<sup>な</sup>しの忝<sup>かたじけな</sup>さに、涙<sup>なみだ</sup>は止<sup>と</sup>めんとして  
 止<sup>と</sup>めあへず、水晶<sup>すゐしやう</sup>の珠<sup>じゆ</sup>數<sup>ず</sup>俄<sup>はか</sup>に断<sup>き</sup>れて、留<sup>とど</sup>まらぬ珠<sup>たま</sup>のばらばらと緒<sup>を</sup>より  
 亂<sup>みだ</sup>れて落<sup>お</sup>つるが如<sup>ごと</sup>く、泫<sup>げん</sup>然<sup>ぜん</sup>として泣<sup>な</sup>きに泣<sup>な</sup>きたり。

## 其二十二

經きやうは誦じゆしたりといへども老人迷魂らうじんめいこんの術じゆつを知れるにもあらず、心こそ  
惑まどひたれ水野奪魄みづのだつぱくの法ほうに致いたさるべくもあらねど、水野が胸中きやうちゆうの消息せうそくは  
水野ばかりぞ知る、傍觀はたより云へばたゞ是恰これあたかも神文密呪しんもんみつじゆの妖あやしき道みちに  
因よつて縛心鎖意フアッシンネイトされたる人の如ごとく、今までの水野某いままはいづくへやら消  
はて、全く愚痴文盲ぐちもんもうの爺婆ぢやばのやうになり、一心いつしんに御佛みほとけを頼たのみ奉たてまつれるさ  
まの、男兒をとこらしからず惘然あはれにのみ見みはたり。  
西にしに對むかひて放はなちても東ひがしに對むかひて放はなちても、滿みつる月の形かたちと引絞ひきしぼりたる  
強弓がうきゆうを、きつて放はなつ時ときおのづからの快こゝろよきあり。南みなみにむかひて決けつしても  
北きたにむかひて決けつしても、千頃せんけいの瀧水たまりみづの漫まん々くたるを、堤つゝを切きつて決けつする  
時ときおのづからの快こゝろよきあり。そもく心の後あとへも先さきへも行ゆかざるを悶もだと  
は云いひ、一方いつぽうへ爽さわかに走はしるを快こゝろよしとは云いふなれば、佛陀ほとけの利益りやくは有あ  
にせよ、無なきにせよ、水野みづのは今いままさに此こゝろよの快こゝろよきを味あじはへるなるべし。

星辰上にかゝり、山河下に布ける此の天地の大にして大なるをおもひ、  
 萬年萬々年の前に萬年萬々年あり、萬年萬々年の後に萬年萬々年ある  
 此の歲月の久しくして久しきを思ひ、さて此の天地の立てる所以をお  
 もひ歲月の經る所以を思ひて、此の天地と歲月との存在を、たゞく  
 無意義なる事實のみと認めなば、誰かは味氣無き感に撲たれて悲み傷  
 まざらん。されど此の天地と歲月との存在の、眞は無意義の事實のみ  
 ならで、其中に意義あるなりと認むる時は、誰かは乳房を探り得た  
 る嬰兒の如く、無限の喜悅に胸を躍らさざらん。意義あり、意義あ  
 り、無意義ならず、神の御心即ち意義なり、佛の御心即ち意義なり、  
 化醇の大法はこゝにあるなり、歸善の定數こゝにあるなり、大慈の  
 光明は柔かに山村水郷を包めるなり、大悲の音樂は斷ゆる間も無く古  
 往今來に亘れるなり、我は此の溫暖き意義の中より生れたる子なり、  
 神の子なり佛の子なり正眞の子なり、我と神佛とは血の相通へるな  
 り、と如是思ふ時おのづと悦ばしからば、水野は今まさに此の悦びを  
 おぼえたるなるべし。

水野のやうやく念じ終われる時、老人はまた水野に對ひて、  
『あゝ御信心なさいまし、自然に有りがたいことが能く解つてまゐります！。まあ何様な事か存じませんが、御様子を見ましたところで、よくくの御心配事が御有りなさると御察し申ます。御籤を御戴きなさい、御籤を御戴きなさい。あゝまだ御戴きなさつた事が御有んなさらないので、御勝手が知れないのでございますネ。宣うございませ私わたくしが戴いたいてあげましやう。』  
と、世話を焼やきて水野がまだ何とも答をせざるに、はや御籤を管さる僧そうの許もとに至いたりぬ。  
やがて僧そうは御籤箱おみくじばこをふるなるべし、かたくといふ音おとは小暗おくらき其その座ざのあたりより聞きけぬ。

## 其二十三

よしや大吉ならぬまでもせめては凶ならぬ御籤を得て、憂に沈み悲に陥れる氣を引立て、信心の勇を附けて呉れんと爲たるらしき親切の老人が、思ふこと違ひて甚く望を失へるは、忽ち先づ其の色に現れて、僧より受取りし御籤をば、力無げに輪に巻きながら、鈍るく此方へ歩み來れるに、水野は見ずして既に其の文の凶なるを知れり。

第何十何番大吉といふならば、如何ばかりか悦び勇んで示すべきを、老人は巻きたるまゝ御籤を水野の懷中に軽く押入れて、

『何様か吉凶にか、はらず御信心なさい。大吉でも驕れば凶に反ります、たとへ凶でも御信心を強くなすつて、それからまた改めて御籤を御戴きなすつてごらんさい、吉になりますこともございますものです。吉につけ凶につけ御信心が大切です。決して信を御冷しなすつてはいけません。さてそろくもう下向いたしましやう。』

と、云ひ終つて本尊をまた一拜して、おのれ先づ御堂を去らんとしたり。

老人が様子の急にそはつけるは、何の意も無かりし我に智慧をつけて御籤を取らせたるに、その御籤のことのほか凶かりしかば、却つて其のために憂を増し、悲を添ふることもやと、氣の毒さに堪へかねて傍に居づらく狭くして正直なる心の憫れにも落着きかぬるが爲なるべし。平生の我を知らずして、たゞ自己が身にのみ比較ぶれば、然る心遣をするも無理ならねど、御佛の廣大なる御誓願をこそ頼み奉りつれ、御鬮といふ事は御經にも見えず、賣僧の仕出したるなるべき春の遊戯の寶引といふにも似たる埒無く據無き御籤の文なんどに、我いかで心を動かされんや。それとも知らずして性質の好き老人の、心を遣ふ笑止さ、と水野は却つて老人を憐み、わざと懷中の御籤を其儘にして讀まず。共に石路の長々しきを下向しけるが、老人は懷中より折本になりたる普門品の小きを取り出して、

『だいなしになつて居ります物を、呈げると申しては失禮ですけれど、

まあ如是かうじやういふ物の事ものことですから御免ごめん下さい。これを貴君あなたに差上さしあげますから、何様どう様か御取おとりなすつて下さいまし。私はもう無書そらで記おぼえましたから、此書これは用ようが明あいたのでございませうが、何様どう様か貴君あなたも御拜おがみなさるたびに、これを御覧ごらんになりながら御經おきやうを御あげなすつて下されば、私わたしは大變たいへんに嬉うれしいと思おもふのでございませう。それに此この末すゑの方に私わたしの名住なとこ所ろが小さく書いてございませうから、何ぞの御序おつひででも御有おありでしたら御立寄たちより下さいまし、いろ／＼御利生ごりしやうの御話おはなしやなんぞを致いたしましやうから。ではまた明日みやう御目にちにかゝりませう。どうか撓たゆまずに御信ごしん心くなすつて!。』

と云いひたき事ことのみを云いひて終つひに別わかれたり。

冊子ほんは言ことを費つひやして辭いなむべきほどのものにもあらず、特ことに快こころく受うけ納をさめて芳志かういを無むにせざらんは、差さし當あたつての道みちなるべしと、水野みづのは老人らうじんに厚意かういを謝しゃして、袖そでを分わかつて東方ひがしへ去さりつ、先まづ普門品ふもんほんを懷中ふところに入る、に、巻まきたる彼かの御籤みくじのかさ／＼と手てに觸ふれたれば、引交ひきかへて取り出いだして其文そのぶんを讀よむに、

第七番 凶

登 <sup>ふねにのぼりて</sup> 舟 <sup>レ</sup>	待 <sup>びんぶうをまてば</sup> 二便	風 <sup>一</sup>
月 <sup>げつ</sup> 色 <sup>しよく</sup>	暗 <sup>くらくしてもう</sup> 朦 <sup>ろう</sup>	朧 <sup>ろう</sup>
欲 <sup>かうりんをきしらししてさらんとほつすれば</sup> 下 <sup>下</sup>	輾 <sup>せん</sup> 二香	輪 <sup>一</sup> 去 <sup>上</sup>
高 <sup>かう</sup> 山 <sup>さん</sup>	千 <sup>せん</sup> 萬 <sup>ばん</sup>	里 <sup>りなり</sup>
		つゞける山々恐ろしく 高くしてそれも叶はぬ

とありて、ひしくと我が身の上うへに巧よく中あたりたり。

もとより取るに足らぬこと、は思おもひながらも、不思議ふしぎに中あたれる此この文ぶんの流石さすがに胸むねに徹こたへて心こころさびしく、じつと眼めを留とめて見みれば、末すゑの方にかた女をんな文字なまじにて細こまかに注ちゆうし記しるせる其最そのまっさい先に、

病事やまひごとは十じゆうに六七本復ほんふく無なし、長ながびきたらば後のちは息災そくさいになる事こともあるべし、よく信力しんりきをもて佛神ぶつしんを頼たのみて吉よし、

とありたるは、いよく何なにとなく不ふく快わいを感じかんて、腹はらの底そこより寒さむの上さむりのぼるやうにおぼえたり。

何<sup>なに</sup>とか思<sup>おも</sup>ひけん水野<sup>みづの</sup>は引返<sup>ひつかへ</sup>して、復<sup>また</sup>相良<sup>さがら</sup>を訪<sup>と</sup>ひぬ。待<sup>ま</sup>つ事<sup>こと</sup>一時餘<sup>いちじあま</sup>りにして終<sup>つひ</sup>に相良<sup>さがら</sup>に親<sup>した</sup>しく會<sup>あ</sup>ひ得<sup>は</sup>て、必<sup>かな</sup>ず見舞<sup>みま</sup>はんとの辭<sup>ことば</sup>を得<sup>は</sup>て歸<sup>かへ</sup>りしが、幸<sup>さいはひ</sup>にして今日<sup>けふ</sup>は休校<sup>やすみ</sup>の日<sup>ひ</sup>なればこそ宣<sup>よ</sup>けれ、吾妻橋<sup>あづまばし</sup>にかゝれる時<sup>とき</sup>は既<sup>すで</sup>に九時<sup>くじ</sup>に近<sup>ちか</sup>からんとしたり。

其二十四

雷神門はいつもながら人のぞよつきて目まぐるしき地なり。わけて今日  
日は日曜の事とて、搔頭に花を飾らする九歳十歳の女の兒、金文字  
かゞやく天鷲絨帽子かぶらせたる洋服姿可憐らしき六歳七歳の男の兒  
など引連れて、世を樂しげに仲見世に入る御母様もあれば、農家には  
違無き乾疥面に、白粉の不均の奇異にをかしき、猫が化けたやうな小  
娘連の、何憂事も知らで觀音様に參るあり。妾も人生の春に遊べる蝶  
々鬘の、まだ何事も知らざりし頃は、たゞあどけ無う面白う此地を極  
樂のやうに思ひし時もありしと、遙に山門を望むにも往時懐しく、通  
りすがりなれど御堂の方を一寸拜みて、そのまゝ東に切れて行けば、  
『姐様、如何です、御安くまゐりませう。』  
『姐様、如何です御安く如何です。』  
と車夫の聲々かしましく煩さし。

久しぶりにて渡る吾妻橋より川上の方を遠く見れば、水は昔見たりし  
 如く緩く流れて、右手に長き一帯の堤の、其の状も更に記憶に異ならず、  
 岸の櫻の葉も透けるながら、その花の眺めもおもかげに立つて、あ、  
 彼の花の隧道のやうであつた中を、夜の風の些寒かつた時、彼人に手  
 を取られて人目の羞しく、暗き方に身を寄せて歩きし春の宵もありし  
 が、思へば今其事の思ひ出さるゝも甲斐無く愚かなりと、しきりに路  
 を急ぎて橋を渡り盡し、また煩さく車夫の勧むる中を停車場へと向  
 ひぬ。

乗れと勧められて乗らぬを車夫の憎がりて、

『姐々、瀧車なら猶の事、乗らないと間に合はないよ、九時四十五分だ  
 からもう發車のだよ。』

『そんなに急いで歩くと女振が下るぜ。』

『瀧車までなら直だから、乗せてつて上げようか、無錢でも関わらないん  
 だ、ハ、ハ、ハ。』

なんどく口々に下賤のものゝ好きな事をいふに、虚言とは思ひながら、

おのづと氣の急きて、疾足になり、やがて停車場に到り着けば、車夫も出鱈目は云はざりしと見え、危くも乗り後れんとするほどのところなりけり。

切符を買ふ間も疾しや遅しや、

『早く早く、』

と驛夫の云ふにいよく慌て、車中に入れば、どしんといふ恐ろしき音して扉は烈しく閉められ、號令笛はピーと鳴り、車は動き出しぬ。機關手の手荒き男なればにや、車の俄然に強く動き出したるに、人は車室に多からざりしながら、いづくに座らんかと席を取り迷いて、未だ身を落付くるに暇あらざりしお龍は、忽ち危く倒れんとして、女の意氣地無くよろくくと歩の纏る、時、ハツと思ひし折は既に遅くして、猶新しき吾妻下駄の、榎齒の角立てるを以てした、かに、後方の人の足を踏みたり。

## 其二十五

お龍はやうやくにして踏止まりて、驚き易き女氣のどつきりと胸を躍  
 らせつ、何思案する暇も無く、

『御免なすつて下さいまし、飛んだ過失を致しました。』

と振り顧りさまに先づ謝びて、心の之くところを一ト目見れば、是は  
 如何に足袋無き其の人の足の小指は、はや湧き出づる血潮に塗れて、  
 負傷の様子もおぼろげながら、岩根杜鵑花の花の影の流水の底に動く  
 が如くに紅色流れて止まらず、いまだ古びぬ薩摩下駄の、一ト角は忽  
 ち殷朱となつたり。

あなやとばかり我も驚けば人も驚きて、忙がはしく下駄を脱ぎ捨てつ、  
 男は急に袂を掻探りしが、左方にも右方にも片紙だに紙はあらずし  
 て、たゞ小さ折本のみの取出されたる其間に、お龍は既に我が小包を  
 傍の座に置き、手早く帯の間より白紙を取り出して、

『まあ何様どうして御謝罪おわびを致いたしたら宜よろしいのでしやう、飛とんでも無ない事ことをいたしました。どうかまあ貴下あなた、御腹立おはらだちでしやうが何様どうか貴下あなた、御勘ごかん辨べんなすつて下くださいまし。定めし御痛おいたみでございませしやう、あゝ濟すみませんことをいたしました。』

と面おもてを赤あかめ涙なみだを含ふくんで誠意まごころに謝罪わびながら、身みを低ひくく屈かめて血汚けがれを拭ぬぐひつゝ、塵埃ほこりに穢よじれたる足あしの緒あかく汚きたきを、織ほつそり々としたる指ゆびの雪ゆきと白しろき手に執とりて、早はやくも拭ぬぐひ捨すつる紙かみの血ちに染しみて花鮮はなあざやかなるを幾枚いくまいか散ちらせば、男をとこはお龍りゆうの手てを拂はらひのけ足を縮ちぢめて、

『ナアニ構かまひません、これんばかりの事こと、痛いたくも何なんともありはしませんから、勘辨かんべんも何なにもありや仕しません、たゞ潮時しほどきの所爲せゐで血ちがでるのでしやう。紙かみを少すこし頂戴いたゞきさへすりやあ宣ようございませす。』

と云いひし限り、ふた、び手を觸ふれしめず、

『でも塵埃ちんごみでも入はいりますと悪わるうございませすから。』

と云いふをも更さらに耳みみに入れて、自みづから一應いちおう清潔せいけつに拭ぬぐひて、幾重いくへにか疊たみたる紙かみに傷處きずを包つめば、お龍りゆうは袂たもとより絹きぬの白汗巾しろはんげ兒ちの清きよげなるを出いだして、

前齒まへばに啣くはふるが早はやきかピリ、と引き裂きき、男をとこの辭いなまんとするを辭いなむ間まあらせず、體裁さまよく巧者かうしやにくるくゝと巻まきて引結ひきむすびけるが、裂ききたる時ときに唇くちや觸ふれたりけん、その結び餘あまりの一端いったんには、血のりならぬ紅あかきもの、微かすかに見みえたり。

車中しやちゆうのすべての人々ひとの眼めは、悉ことごとくく二人ふたりが上うへにのみ注そがれ居あるを、男をとこは上うへ無く不樂わびしくおぼえてや、

『紙捻こよりでも濟すみましたものを御氣おきの毒どくな！。いろく御世話おせわになつて却かへつて濟すみませんでした。』

と、云いふべきほどの挨拶あいさつは眞四角まっしかくに云いひ仕舞しまひて、一寸ちよとこなたを見て會釋あしやくせしが、

『何様どういたしまして、妾わたしこそほんとに濟すまない事ことをいたしました。何卒なにとぞ御免ごめんなすつて下さいまし。』

と、お龍りゆうの云いひし詞ことばは聞きしや聞かざりしや、愛想あいそ氣げ無く後うしろを見みせて車窓まど近く居寄あより、何見なにみるものあるべくもあらぬ窓外そとの方かたを見みたる其その横よこには、先刻さきに懷中ふとこより出いだされたる小ちひき折本をりほんの置おき棄すてられたり。

見るみ氣きもなく何なんの本ほんかとお龍りゅうの見たみる時とき、其冊子そのほんの最初さいしよのところは丁ちよ  
度開うじあき居をりて、配ふり假名がなのあるに誰だれにも解わかりて、觀世音菩薩普門くわんぜおんぼさつふもんほんと  
は明あきらかに讀よめたり。

## 其二十六

思ひのほかの品なりしに、お龍は驚き疑ひて、露照る美しき眼を睜り、あらためて男を一ト目見しが、男はそれとも心付かず猶車外を見居たり。

既に其人の履物の汚れを清めたり、落ち散つたる紙の眼に厭はしきをも一ト纏にして投げ棄てたり、謝罪るほどはあやまりて、今は何爲べき事も無きなり。お龍は彼の男とは斜線に、其の反對の側の車窓近き席を取りて、はじめて身をも心をもおちつけたり。

普門品！、あの普門品！、彼書はたしか觀音様を信ずる人の讀む御經！。五六十の爺婆ならばいざ知らず、若い盛りの當世の人の、しかも古風を守る農夫町人でくもある事か、新しきを追うて學問に身を責めれば、まづ神佛とは縁の遠さうな書生風の此様いふ人の懷中から、普門品とは似合はしからぬ！。何のやうな悲しい願があつての

佛頼みか知らねど、あゝ想ひ出して胸が痛む、妾も一昨年の丁度  
 今頃、思ふ人には遠く離れて、空の色も風の音も情無い知らぬ他国の  
 駿府の秋、いくら手紙を出しても問訊ねしても、返事さへ来ないのが  
 氣になつて氣になつて、よもやとは思へども心變りか、それともまた  
 病患でも仕てゝは無いかと、恨めしくもあれば心細くもあり、はて  
 は茫然と門口に立つて、何が見えるでもない東京の方を、空に見詰め  
 てはほろり／＼と、馬鹿らしいほど泣いて泣いた末、思案に餘つたと  
 ころから願掛けして、安東の清水の觀音様には御經こそ誦げなかつた  
 が日参りもすれば、足久保の楠木の觀音様の御利生の話を聞いては、  
 二里からの田舎道を歩いた上に、草臥返りながら、御百度まで踏んで、  
 何卒手紙の返事の参りました彼方の様子の分りますやう、若し又病  
 氣災難にでも罹つて居りますなら、御利益をもつて助かりますよ  
 うにと、自分の身體は一日一日削るやうに癪せるのも餘所にして、一  
 心になつて信心を仕た苦しい切ない經驗もあるが、忘れても爲まいも  
 のは戀路の迷ひ、思つて思ひ止む日も無ければ、泣いて泣き足る夜も

無く、生きては居ても生きてたくも無く、死なうとしても死にきれもせぬ彼の厭なく、な情無い心持！。我身の痛かりし経験に人の痛さも思はるゝが、あ、猶若い此の人の信心の、よしや頼み無き老人の親の病氣の爲故でもあれ、また何の様な辛い悲しい遣る瀬無い事のためでもあれ、たゞ戀故の信心で無かれかし。今妾が仕たる過失は、時の拍子の事なれば、誰も容赦しては呉れさうな譯ながら、あれほどの血の出た負傷を仕て、露腹立たしげな顔色もせず、また恨めしき眼色もせず、毫も變つた様子は無くて、水の流れたやうにさらりと濟ませて、後には物も残さぬ風情の寛大さ！。終には反對に禮まで言ひたるに心の優しさは見えながら、それから知らぬ顔つくつて、彼方向いたる振舞の少し素氣無きに、飼はれても人の氣は取らぬ鷹の素振の、一寸憎らしいほどな氣位もあらはれて、女さへ見れば嫌に笑ひ掛ける、世に有りふれた若い人などは、其の行方も全で異れど、さればといつてぎしつきもせず、氣立ても心持も何と無く違つて、衣服容姿は此といふことも無き書生ながら、おのづと普通には思へぬところある人！。

か  
斯様いふ調子あひの人なんぞが、若し萬二十年二十年の後に成つて、  
りつば  
立派な傑れた人なんぞになるのではあるまいか？ あ、修行盛り出世  
ざか  
盛りの此の若い人！、それに付くつても彼の普門品！。屹度果敢無い  
こひ  
戀なぞの、其様な事のためではあるまいけれど、どうか戀ゆえの信心  
な  
で無かれかし！。と我身の往時につまされて、じつと其冊子に留めし  
まなこ  
眼を、今しも其人の後姿に移して横顔をそつと見やる折しも、ふつと  
をじこ  
男は此方を見返し、圖らず眼と眼と相射しが、はやくもお龍は男の睫  
げ  
毛に怪しき露の珠あるを見たり。

## 其二十七

人おのく身あり、身の居るところあり。又おのく心あり、心の思ふところあり。されば相知らぬお龍と男との、男はお龍の我が爲に何を思へるぞとも知らねば、お龍はまた男の我ゆゑに何を悲しめるぞとも悟らむやう無きなり。

自ら感ずる心身の疲れを、せめては瀟車の内に休めんと、少時を待合はせて此に乗りたるに、何となく氣の弛みてうつかりとしたる時、忽ち足を踏まれて驚きしが、眞心を表して謝罪らるゝに怒らんやうは無く、かゝる事は有り勝の過失にて珍らしくもあらず、且は又、云はゞ我にも不注意の咎の無きにはあらぬをやと軽く思ひ棄てつ、却つて他の我がためにまめくしく傷を裏み汚を拭ひて呉るゝ氣の毒さに堪へかねて、よきほどに挨拶して身を退きたる男は、何を見るにもあらず窓外を見ながら、出血を疾く止まらしめんがために膝に載せた

片足の、猶聊か疼痛をば覺ゆるにつけて、嗚呼何ぞ人の世のこの  
 如是愚しきや！。たま／＼我に過失したる此の若き婦人は、我が思ふ  
 人の如くなる端嚴の相こそ無けれ、婀娜たる姿、野の花のおのづから  
 人の意を惹く色香あつて、一車の客皆眼をそばだて、見たるほどなれ  
 ば、彼の人の我に思はる、が如くに此の女もまた或は他に思はる、事  
 の無きには限らじ。我が身の經驗に我よくぞ知る、人を思ふもの、苦  
 しさは、魂魄を絞木にかけられて斷えず壓し搾らるゝに異ならず、何  
 につけ彼につけ、夢につけ現につけ、愁ひ易く悲み易くなりたる心  
 の、事あるごとに責め搾らるれば、誰が縫ひてか痊すべき胸の深創よ  
 り、渾々として流る、血潮の、火とばかり熱きも空しく冷えて、いた  
 づらに地に入つて情無く廢ることの如何ばかりぞや。眼に見ぬ其血  
 こそは尊くも尊き人の眞誠の生命にして、眼に見ゆる此血は言ふにも  
 足らぬたゞ鹹き紅き水なるを、僅に一指の端を傷つけ數滴の臙脂を散  
 らせば、性情の優しさ見ゆる此の婦人は、偽りならず我をいたはしが  
 りて、心を盡し手を盡し慰め呉れしが、若し此の女を思ふ男ありて、

彼の人を思ふ我が如くに、果敢無き戀の深みに悩み、日と無く夜と無  
 く、折にふれ事につけ、泉の如くに止まらぬ血を心窩の奥底より流し  
 溢らさば、それを此の女は何とか見るべき？。我が足の指の一寸節二  
 夕節、此の紅き水の幾掬は、よしや過失のために亡失はれたりとて、  
 我斯ばかり恤られでも可、たゞ思ふ人に思はれぬ辛さは身に徹みて悲  
 しくおぼゆれば、あはれ此の優しげなる若き人の、若し人に思はれな  
 ば人を思へかし、思ふ人あらば其人を思ひて遣れよかし、戀の誠に責  
 められて、壽命を溶いて涙と流し棄て、男兒の智慧をも保ちかねて、  
 愚に甘んずるに至れる此の我が如きものにも會はゞ、假令其の人を蟲  
 の嫌はゞとて、せめては可憐とも思ひて遣れかし。我が身につまされ  
 てつくぐと思ふ、あゝ人に思はれなば人を思へかし。こればかりの  
 傷にだに痛はしとおもふが、女性の欺かぬ情ならば、縫ふべき針も糸  
 も無き悲しき創口より流れ流るゝ火と熱き血の、花と鮮やかなるを見  
 たる時は、必らずあはれと思ひて遣れかし。されど測り難き世の習、  
 此の女もまた我が思ふ人の如く、或はおのれを思ふ男の、心血を盡し

て悲かなみ悶もたゆるをも、あだそらとに天飛とんぶ雲くもと見過みして、あはれみてもやら  
 ず悲かなみてもやらず、其その情無つれなきを啣かたれやする？。僅わずなる斯かばかりの傷きず  
 の如ごときには、心こころをつかひ言葉ことばを費ついやすにも當あたらぬながら、此これを大だい事じのや  
 うに思おもふも愚おろかなる世よの態すがたかな。我われは今いま恐おそろしき傷きずを抱いだきて、絶た間ま無な  
 く泉いづみなす血ちを流ながしながら、あはれとも思おもはれぬ悲かなしき身みなるをや。これ  
 ばかりの血ちの鳴呼あ、な何なにかあらん！。それにつけても此この若わかき女ひとの、願ねが  
 くは人ひとに思おもはれなば人ひとを思おもへかし、と此これは我わが身みの現いま在まにつきて思おも  
 入いりながら、偶ふと然うしろ後方うしろをば向むきたるなりしが、圖はからず眼めと眼めと相射あひ  
 入いる時とき、男をとこもまたお龍りゅうが何なにを思おもひてか涙なみだに其眼そのめの潤うるめるを觀みたり。  
 相會あひあつたる眼めは忽たちまち離はなれぬ。男をとこはまた前まへの如ごとくに窓外そうぐわいを眺ながめたり。  
 女をんなは男をとこの如何いかなる人ひとなるを知らず、男をとこもまた女をんなの如何いかなるものなるを  
 知らず、同おなじ車くるまに乗りて同おなじ道みちを、同おなじとこところへ行ゆく身みながらも、心こころ  
 はそれくのおもむく方ほうに馳はするも浮世うきよの態すがたなりや。  
 やがて瀟車きしやは白鬚ていしやちやうの停す車ちやう場ちやうを過すぎて、はや鐘かねが淵ふちの停てい車しやちやう場ちやう近ちか  
 りぬ。

お龍は徐に立上りて、

『どうも飛んだ失禮を致しました。もう妾はこの先で下車しますのでございますが、御痛みは如何でございますか？、些はお宜しうございますか、まことに濟みませんことを致しました。では勝手ではございしますがこれで失禮いたします。』

と、男も其處で下りるとは知らで物堅く挨拶すれば、男は口數少く、『いやもう何ともございせん、何様か御構ひ無く。』

と云ひたるのみ。

瀟車は鐘が淵に着きて男先づ降り、それより人々につゞきて女も降りぬ。女の停車場の構外に出でし時は、男の姿ははや見えざりき。

其二十八

家並立續ける都會に育ちて、賑やかなる道路をのみ歩きつけたるものは、右も左も田甫にして、遠見に榎やら松やらの木立、その蔭に箱庭にありさうな藁葺の家の四ツ五ツ並ぶといふやうなる田舎へ踏出して、十字路に問ふべき店なきを恨み、三叉路に尋ぬべき人あらぬを悲み、はては間違へずとも濟むべき筈の路を兎角に間違へて、あらゆるところに迷ひ込むが常なり。鐘が淵の停車場より四ツ木へは、何の譯も無く知れ易き路なるを、お龍は如何にしてか誤りて、狐に誑さるゝと云ひし今朝の戲言も思ひ出されてをかしき無益路を歩きし末、やうやくにして目ざす其の村へ着きたり。

ばつちらけ髪を手拭の鉢巻に壓へて、ねんくねんくと兒守する村の娘の十三四なるに、

『もし、山路さんといふのは、』

と尋ぬれば、

『伴れてつて遣るべい。』

と前に立つて歩いて、

『此處だよ。』

と教へて呉れたるは、門のがつしりと厳めしくして、厚き茅葺の屋根も高き、物持らしき立派の家なり。これほどの家とは聞かざりしがと、少し訝りながら音なへば、丁度端近に居たる、般若顔の丈高き女の、衣服は此家の主人の妻なるべく見えて、可笑しきほど大なる丸鬘に結びたるが、人を媚嫉むやうなる眼つきして、しばらくは頭の上より足の先までじろくくと見たる揚句、

『それは隠居所の方でございませう、こちらには水野なんていふ人は居りません。其家へ行つてお聞きなさいまし。』

と、可厭に慳貪に云ひ棄てて、障子びつしやり奥に入りたり、此家と隠居所との間に何のやうな譯のあるかは知らず、また何程大した大々盡の奥様なれば左様は勿體ぶるか知らねど、悪く人を見下したやうな

没義道の忌々しい大顔な田舎婦めときかぬ氣のお龍は打腹立ちしが、怒つて甲斐ある事ならねば、其儘突と外に出でたり。

見れば前の兒は猶其處に居りて、ねんくねんくと負へる子を賺しながら、かな糸をもて手鞠を造り居たるに、お龍はまた其の娘を呼びかけて、

『折角汝さんに教へて貰つたけれど、此家は妾の尋ねやうといふ家と異つて居たの！。隠居所の方といふのを知つておいでなら、一寸教へて下さいな。』

と、笑をつくつて云へば、子守も莞爾つき、

『あゝお濱ちゃんの家的事かい、そんなら猶の事だ、伴れてつて遣るべい。』

と云ひながらずんく先に立ちて、巻きかけたる鞠を袂にして導きくれたり。

『へーエ、お濱ちゃんといふ女が其家には居るの？。』

『アレ隠居の方へ行く人で居て、それでお濱ちゃんを知らないだかエ

?!。』

『だつて妾は初て来たもんで、水野さんていふ方を尋ねるんだもの!。』

『水野さんへ尋ねて来たつて!、アノ先生の水野さんところへ?!。』

振返つて子守は新にお龍を見しが、其の都びて清潔に美しきは、何知

らぬ眼にも明らかに映りたり。

『姐さんは水野さんの妹ッ子かエ。』

お龍は其の頓狂なる考へと唐突なる問とに自然と笑を催さしめられ

たり。

『何故?。』

『何故つて、東京からわざわざ来たので無いかエ。』

『ホ、。おもしろい事をお云ひだネ、そりやあ東京から来たのだけれ

ども、東京から来たとつて妹たあ定りやあ仕ません。』

『ア、解つた。ぢやあ姐さんは水野様の内君になる人だベエ。』

『いやだよ、そんな飛んでもない事を!。ホ、。妾あまだ水野さんて

いふ方にも、お目にかゝつた事さへ有りやしないのだよ。』

「隠してもいかないだ！。姐さん今些紅い顔したゞ！。ホレもう此家が御亭主の家だ。植込いぢつて居るのがお濱ちゃんのお爺さんだよ。」

子守は五六歩いきなりに駈け抜けて、植込の不揃いになりたるを缺もて剪り居たる禿頭の澤やかに人の好きさうなる老人に對つて、一二間こなたより左らでも徹る聲を遠慮無く大きくして、

「爺々！、妾東京のお客様を案内して來たゞよ。」

と、確實に然様と思ひ込んで、獨り承知して叫び知らすれば、吉右衛門は不意なるに驚きて答へもせぬ時、此方に向へる入口の障子はさつと開けられて、繪に見るやうなる色白の容貌好き娘の、星のやうなる美しき眼を光らせたと、水野とは此人なるべき若き男との現はれしが、是は如何に其男は今し方瀛車の内にて妾が傷つけし其の人なれば、互に顔を見合はず途端、言葉こそ出さぬ彼此共に、これはと驚きたる其の様子、明らかに傍の人々にも見えたり。

「ホーラ、隠してもいかないだよ！。兩方で知つてたゞ！。」  
子守は獨り定に凱旋を擧げて、得意の顔つきして彼方に走り去り、お

濱<sup>はま</sup>と吉右衛門<sup>きちゑもん</sup>とは無言<sup>むごん</sup>にお龍<sup>りゅう</sup>水野<sup>みづの</sup>を見れば、お龍<sup>りゅう</sup>はたゞ何<sup>なに</sup>とも分<sup>わか</sup>らぬ  
心地<sup>こゝち</sup>に、かつと紅色<sup>くれないさ</sup>潮<sup>しほ</sup>したる面<sup>おもて</sup>、一<sup>いち</sup>朶<sup>だ</sup>の芙蓉<sup>ふよう</sup>十分<sup>じゅうぶん</sup>に醉<sup>よ</sup>ひたり。

其二十九

既に我が尋ぬる水野とは其人なるべく、又今聞けるお濱とは其娘なるべしと猜し知りたれど、飛んでも無き子守女の言葉に度を失ひたるお龍は、思はざる横風に扇られて目ざすところに船首を向けはぐりたる船の、先づ取りあへず間近なる纜杭に取りつけたるが如く、吉右衛門に向ひて小腰を屈めつ、

「妾はあの、岩崎の母の許から参つたものでございますが、水野さんがおいでになりますなら何卒………」

と、辛くもこれだけを言ひてホツと息吐きたり。

合點の悪からぬ吉右衛門は、例の眼鏡越しにお龍を見しが、手にせし剪刀を樹の枝に一寸掛けすて、清らなる赤ら顔に笑をさへ含み、

『ハア左様ですか、さあ御上んなさい。丁度今しがた御歸宅でした。お濱や、先生のところへ御客様だよ。ハ、ハ、ハ、お蝶ッ子が何を下ら

ない!。」

と未は獨語のやうに云ふところへ、生々として美しき娘は下り來りて、たゞ纒に頭を下げたるばかりに愛度氣無く會釋し、

『どうか、此方から御上んなすつて、』

と先に立つてずつと庭を貫して導くは、入口より通さば今は其處に取り亂したる室の他人には見せたからぬ狀なるが有ればなるべし。

云はるゝがまゝにお龍は庭前より上りて、通されたる室にちまぢまと座れば、

『一寸御待ちなすつて。たゞ今直、』

と云ひ置きて娘は彼方に去りぬ。入口近き茶の室とおぼしき方に、其の人も娘も在る様子ながら、何を爲し居ればにや猶出で來らず、我たゞ一人兀然として室の内を見れば、二本立の書籍一ツ机一脚、本箱に餘れる本の幾十冊か壁に添ひて積まれたると、奥行きの淺き床の間に西洋本の少からず置かれたる其他には何の道具も無く裝飾も無く、味も無く素氣も無き其の態は、悪口を云はゞ巡查の交番所に少しばかり

り書籍のあるやうなものなり。

お龍は生まれてより未だかつて見ぬ室の状態に、荒野に立つたるやうの心淋しさを覺えて、何を書いたものか知れぬ西洋本の、表紙の金字燦々と輝けるにのみたゞ所在無さの眼を留めて見つめ居れば、物靜かなる田舎の晝間も寂として、彼の老人が使ふ剪刀の音は時々ちよつきりちよつきりと聞は來るなり。

心おのづから靜まれば耳おのづから聰くなりて、小聲に相語る彼方の室の話は、幽微にはあれど今は聞ゆ。

『左様！、それで知つて居らしたの！、あの人が先生の足を踏んだ人なの！。あら可厭な人だこと、妾嫌ひだは！。』

『だつて過失だもの仕方が無い！。大變氣の毒がつて叮嚀に謝つたのだもの却つて優しい人だと私は思つて居るよ。』

『左様ねえ！。左様いへば汗巾を破つて傷を巻いたつて。ア、矢張り眞實は好人なのね！。ぢやあ妾は嫌ひぢや無くつて好なのよ。何だか最初見た時から妾は好だつたのよ。だけでも先生の足を踏んだつ

て云ふので嫌だと思つたの!。眞箇に綺麗な好人ねえ!。」

『ハ、ハ、好だの嫌だのつて、お濱ちゃん位いろくな事をいふ人はありや仕ない。そりやあ宣いけれどもお茶でも與つておくれ、置つばなしぢやあ可憫ぢやあ無いか。』

『あら左様ぢや無くつてよ、今御給仕が濟んでから御茶を入れやふと思つて居たのよ。』

『いゝね私には關はなくつてもいゝよ。さあくもう御終だから!。』  
言ふもの恐らくは何の意無からん、聞くもの未だ必ずしも感無くばあらざるべし。

## 其三十

お龍は抑如何なる人ぞや。

お嬢様お嬢様で育てられたる身にはあらねど、生れついでの心情に人とは異つたるところあつて、駿府の叔母のところへ引取られたる其夜、はじめて何も無き座敷に寐かされて、吾家では如是は無かつたものをと物足らぬ心地し、翌日我が荷物にの行李をを解きし次に、我が好きなものゝ數多き中より平生氣に入りの永徳齋の小人形を取り出して、そつと小棚に飾り置きしに、それを固い自慢の叔母の帝釋様のやうな三角の眼にに睨まれて、其様な大きい形體をして人形になんぞを捏ね廻して遊ぶと云ふ事がありますか、藏つて御置きなさい、と唯一言に叱りつけられ、あゝあんまりつまらない情無い叔母様、何様すれば其様な乾魚のやうな氣になつて居らるゝ事かと、恨み疑ひながらも争ひかねて、其時よりやうやく『わたしの好きな物』を身の傍にに置かずして日を

送るに慣るゝに至りたるなり。

されば頼もしからぬ男に一生を過られて、涙の淵瀬に浮き沈みしたるのち、今は他人の家に寄食客の身の長閑らしく玩弄品三昧をするにはあらねど、傳といひ、清といひ、勝といひ、彦といひ、出入る若き男共の争つて氣を取らんとて、折々呉れたる種々の物品の中、傳が持て來れる薄色の瑪瑙の細工の小さき兎の、姿しほらしくふつくりとして、ぼつちりと紅き眼のいと可憐く出來たるが甚く氣に入り、あれかこれかと、アナ絲の色を擇みに擇んで、其のために敷くべき蒲團の花やかに美しきを編みて遣りつ、はじめて其に載せて見たる時、色の映り合ひていよいよ好ましく愛らしく見えたる嬉しさの餘りの戯れに、此兎は妾の大切な人なの！と獨語したりしが、其語を人より聞きて勘違ひしてか、其頃より傳の煩く付き纏ふ、其は何よりの迷惑ながら、今だに兎の可愛さは冷めず、何ぞの折には『兎之さん』と喚びかけて、心の淋しさ遣る方無き時の、語らう友無き孤獨の憂さを、苟且に一寸慰め忘るゝなり。

是のごときお龍は今一室の中に、眼を慰め心を寄せて情懷の遣りどころとすべき物の一つも無くて、床に插花瓶は有りながら未枯れたる花も無く、机上に筆架水滴の影もあらで裸硯の淋しく置かれたるものなるを見て、成程書生さんは如是したものか知らねど、餘りといへば曲の無い何といふ此室の状態と、ひそかに室主を疎ましく思へる折しも、此家の娘が我を可厭な人と云ひしに對ひて、我を優しき人と云ひなし呉れたるを聞きて憎く思はんやうは無く、あゝまだ知りもせぬ人を悪くばかり量つたる事と思ひ返す時、無造作にすらりと間の襖を開けて、次の室より立出でたる男は我が前に座れり。

## 其三十一

お龍が頭を下げて禮をなしつ、やがて言ひ出でんとする間もあらせず、『イヤお待せ申ました、小生は水野です。』

と云ひたる、言語明晰として冗處も無く餘裕も無く、石盤を見るやうに角ばつたる云ひざまの、聲つき自然威勢あるにお龍は吞まれて、釣込まれ氣味に此方も堅くなり、

『あの妾は岩崎の母のところから出ましたもので、』  
と、先づ一句明らかに那處より來れるかを更に告げたり。

『ハア。左様して貴下は御近所の方でさもお有りですか。』

『ハイ、イエ、御承知はございますまいが妾はあの、彼方に御厄介になつて居るものでございまして、舊は彼方でお稽古を願つたものでございませぬ。』

『ア、左様ですか、してお師匠さんはお變りありませんか。』

師匠は打擲いても死なざるべく壯健にして、酒を飲み情夫と連れ立ちて遊び歩けるものを、かゝる生真面目なる人に虚言を云ふことはいくらどがめ、心咎せられぬにはあらざれど、

『ハイ有りがたうございます。まあ別條は無いやうなものでございますが、先般から一寸時候あたりを致して弱つて居りますので。』

『それは何様もいけませんナ、たゞの風邪ですか。』

『イエもう、眞の一寸した事でございまして、しかも治り加減でございますから、お案じ下さいますな。それに就きまして妾が出ましたやうな譯でございしますが、師匠が申しますには、過般からはまた度々のお手紙で、五十の病氣を一々お知らせ下さつたり、其上またいろ／＼お世話を戴いたりしまして、お禮を申さうやうも無く有り難く存じて居ります。早速にも自分で出てお禮を申上げ、五十の見舞も看病も致さなくつてはならないのはございますが、生憎と自分も患つて居りますので、存じながら思ふやうにも参りません。水野さんが在ら

しつて下さるから好いはでもつて打棄つて居るやうで、大變心苦し  
 う存じて居るのでございますが、全く左様いふ譯ではございません。  
 御承知の通りの女暮しで、手前にはばかりかまけて居りまするので、彼  
 様も仕したい、此様も仕たいと色々、心では思つて居りましても手が  
 届きませんから、たゞ陰でもつて神信心ばかり致して居るやうな譯  
 でございます！。と如是申上げて、何様か何分にも悪しからず思召  
 になるやうに、善く汝から有體のところを細にお話仕てお呉れとの事  
 にございます。又、どうか此上ともお世話を下さいますように、老  
 母は勝手な奴だ顔も出さないと、お愛想盡しになりましたも、病人は  
 何も知らない事でございますから、お愛想盡しをなさらないやうに。  
 五十の事は實は我儘な申し様ですが、疾から貴下にお任せ申したつも  
 りで居りまするのでございますから、何のやうにでもお心持次第にな  
 すつて戴きたいので、御親切の貴下のお世話を戴いて、其でいけな  
 ければ残り惜い事はございません、全く當人の運の無いのだと諦らめま  
 す。いづれ其中には是非とも伺つてお禮を申すつもりでございます。

おまへあちらさま  
 汝彼方様へ上つたら、何様か妾が如はいふ心持を有つて居りますといふ事を云つて、十分に御禮を申上げて、而して五十の病氣の様子も伺つて来てお呉れ、と斯様に申すのでございます。それでお馴染みも無い妾ではございますが、他に參るものも無いのでございますから、一寸上つたのでございます。

お龍は果さでは叶はぬ使者の役目を務め果せん一心に、一生懸命になりて如是述べ終りしが、辛くも吩咐けられただけは云ひ得たるにホツと氣息吐きて、男の様子を如何に見れば、男は律義眞正直に物堅く慎みて耳を傾け、見す／＼の我が虚言を實に道理と聞けるやうなるに、此のやうなる人を口頭に操るはと、我差しき心地の爲たり。

『ハイ、一々精く解りました、承知致しました。お言葉が無くてさへいろ／＼に心配は致して居りましたのですから、其様いふお言葉を伺ひます上は猶の事でございます。水野が出来ます事は致しますから、五十子さんの事はお心遣無く、よく御養生をなすつて早く御全快なさるやうにと仰あつて下さいまし。五十子さんは必ず私が癒らせませす。』

何様どうしても一度いちどは屹度きつと癒なほらせますと小生わたくしが申まをしたと仰おつしあつて下さいくだまし。』

人の命ひとのいのちは知るべからざるを、あゝ何なんぞ其言葉そのことばの男兒をとこらしく頼たのもしきや。  
 聲こゑの大きおほきなりたるも思おもはず誠意まことの籠こもりたればなるべし。如斯かくい云いへる其  
 の言葉ことばの力ちからあるに驚おどろかされて、お龍りゆうは今いま又また改あらためて窃そつと其人そのひとを伺うかへば、  
 聊いさか寡やつれたる淺黒あさぐろき面おもての、鼻筋はなすじ通り口締くちしまりて、巖いはも黒鐵くろがねも貫つらぬき徹とほすべ  
 き精神きあひは、切きれの長ながき尾上しりあがりの眼めの中うちの光ひかりに現あらはれたるに、生うまれて初はじめ  
 てかゝる意氣組いきぐみの鋭すどくして烈はげしき、昔物むかしもの語がたりの中うちの勇士ゆうしのやうなる人ひと  
 を眼めの前まへに見みて、あゝ何なんといふ氣味きみのよい人と、深ふかきに望のぞむ千尺せんじやくの崖がけ  
 に立つて吹き來くる秋風あきかぜに袂たもとを扇あふらせたるが如ごとく、凄すさまじきが中なかに爽快せいがいを  
 覺おぼえて、怖こはらしくは思おもひながら好このましくも思おもひたり。

## 其三十二

かゝるところへ新あらたに茶ちやをいれて持もち來りしお濱はまに、はつきりと美うつくしき眼めに優やさしくお龍りゆうを見て、しとやかに其その一いっ盞さんを取とりて薦すすむれば、水野みづのを見みたる目めを此人このひとに移うつしては、懷ふど暗くらき常と綠ろく樹くの高たかく聳そびえたるを見みたる目めに、しほらしく咲さく初はつ櫻さくらの、ぽつと明あかるき花はなの枝えだを忽たちまち見みたる心地こゝちして、おのづから胸むねも開ひらくるやうするに、お龍りゆうは、

『どうもはゞかりさま、恐れ入おそります。』

と身みを謙退へりくだりて會釋あひやくしつ、互たがひに顔かほを見合みあはせしが、笑わらふとも無なく嬌然にっこりとしたる彼此かれこれ一時いちじの笑容あみの中に、語かたらで語かたり聞きかで聞きく心こゝろと心こゝろと働はたらきて、思おもへば思おもひ好すけは好すく性しやうの合あふ同おな士し女にょ同おな士し、何なにの故ゆゑとは無なけれども相あひなつかしみ相悅あひよろこびたり。

されどお濱はまは何時いつまで此處こゝにあるべきならねば、お龍りゆうと物語ものがたりして遊あそびたきやうの思おもひは仕しながら、一盞いっさんを取とりて水野みづのに與あたへて、好よきほどの

ところに茶具を置き捨て、おのれは茶の間に退きて二人の話を聞けり。お龍は猶五十子の容態を聞かでは叶はざるなり。

『ほんとうに段々との深い御親切さまで、まことに有り難う存じます。歸つて御言葉通りに左様申し傳へましたら、何様なにか師匠も悦ぶこととでございませう。左様いたしまして只今は、病人は何様な様子でございませう?』

『いや何様も中々良くないのです。それで大きに心配致しましたが、浅草の醫者を招びに行きました歸路に、たつた今此村の醫者に容態を聞きましたら、大きに見直したやうな具合でして、重病だから何とも云へないが、此儘で日さへ経て呉れまばまあ宣いといふので……………』

『では食事などは?』

『なか／＼まだ食事なんぞといふ段では無いので。やつと流動物が小量許入る位です。しかし變さへ無ければ、大抵は経過日數が定つて居るものださうですから。』

『案じるやうな事はまあ無いのでございますか。』

『左様ばかりにもいきますまいが。』

『變の無いやうに致しかたは無いものでございませうか。』

『そりやあ左様したいのは山々ですが、情無い事には醫者の力でも其處までは何様もなりません。』

『それぢやあ神様にでも御願申すよりほかには!。』

『然様です。とてもまあ其様な事よりほかには!。』

男の聲はこゝに至つて甚く沈めり。お龍は忽然として思ひ浮かぶるところあり。我に對へる此人は誰ぞ。この人は是彼の普門品の主ならずや。何をか獨り物思ひして睫毛に露を湛へし人ならずや。あはれ戀故の信心で無かれかすと、よそながら我が念じ遣りし其人ならずや。何をか獨り物思ひして睫毛に露を湛へし人ならずや。瀟車の中の素振、先刻よりの應對、今の此の様子に、一切は解りたり。師匠は碌にも我に語らざりしが、此人は五十子といへるに深く思を懸けて戀せるなるべし。似合はしからぬ佛頼みにも其胸の中の苦さぞ知らるゝ!。嗚呼一昨年をどしの我われを男子をとこにして見る、其の顔の愁うれひに瘦やせて情無い有様!、

その眼の戀に疲れきつて和やかなるところの彼の乏しさ!。血属や見  
 より有りは有つても、まことに戀に悩む時は、いつか孤獨の身となり  
 果てゝ、誰一人味方になつて泣いて呉れるものも無いのが世の習!  
 あゝ憫然なく人!。と經驗ある身の思ひ遣り深く、

『あゝ、眞實に左様でございます!。神様佛様よりほかには左様いふ  
 時には、御頼み申すところもございません。歸路には淺草の觀音様  
 で、妾も御百度でも踏みまして、何様か快く御なりなさるやうに願ひ  
 ませう。』

と云はれて水野も心嬉しく、

『そりやあ、有り難い御親切の事です。何様か病人の快いやうに祈つて  
 下さい。』

と、全く平凡の人の如き挨拶をすれば、

『アラ、何様したのだらう? 先生が!。觀音様なんかに祈つて呉れな  
 んて!。ホ、ホ、古ぼけた老婆なんか見たやうに。』  
 と何知らぬお濱は之を蔭にて聞きて、聞えぬほどに獨語ちて笑へり。

命令いひつけられたる事は大概果おほよそはたしたれば、ここにお龍りゅうはじめて隙ひまを得て、

『つい申しそびれて居をりましたが先刻さきほどは何様どうも、とんだ過失そきうを致いたしました。此方こちらへ上あがつてお目めにかかると、貴下あなたが其方そのかただつたのでまた吃驚致びつくりいたしましたのでございます。お怪我けがをさせまして眞まことに濟すみません、どうか御免ごめんなさつてくださいまし。』

と改めて謝罪わびれば水野みづのは慨然がいぜんとして、

『ナアニ貴女あなたに踏ふまれて流ながれた彼様あんなな紅あかい水みづ、少許ちつとや若干量そつとなが流ながれたつて何が何なにでしやう！。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。』

と裏枯うらがれたる聲こゑして自ら嘲あざけるやうに淋さびしく笑わらへり。其意そのこゝろを解ときて知るよしも無なけれど、其の言葉ことばの異様ことやうにして其の調子てうしの悲哀かなしみを含ふくめるに、感じ易やすきお龍りゅうは一種いっしゆの感かんに打うたれて、頓とみには答こたへをさへ出いだしかねたり。

## 其三十三

お龍は徐に三絃の糸を弛めて三絃掛へ掛け納むれば、今日目見得に來りし小婢お熊は高麗鼠のやうにくるくると働きて、しきりに其邊を取り片付けしが、煙草盆の傍より玉の煙管のいと小なるを拾ひあげて洋燈近くさし出し、

『これ此様な物が遺ちて居りました、』

といふ。

一ト目見てお龍はそれを師匠に遞與し、

『こりやあ傳さんが遺れて行つたのでしやう。あの人で無けりやあ此様なものを持ちさうな人はありませんから。』

と云へば、お關は受取つて指頭に弄び、

『あゝ然様だよ、屹度彼の男のだよ。今日は妾も大變夙起を仕たし、汝も遠いところへ行つて來たので草臥て居るからつていふので逐ひ立

てゝやつたもんだから、慌てゝ歸つて行つて遣れたんだらう。取り上げて仕舞つて遣らうか知らん。ハ、ハ、ハ、マア堪忍して遣ると仕やう。何でも彼の男は親類内かなんぞに、玉や石の細工をする家かなんぞを有つて居るんだよ。御覽よ、小さいけれども此品だつて買つたら廉くはなさうなものだぞ。』

と、一度はお龍に示して、さて火鉢の抽斗に無造作に藏ひたり。

『ハア左様なんでしやうよ。兎を呉れたんでも分かつて居ますよ。屹度叔父さんか何か、玉屋さんなんですぞ。』

『何様も左様らしいよ。妾も往日瑪瑙の好い色の簪珠を貰つたがね、汝、兎なんぞぢや仕様が無いぢや無いか。今度は寶石入りの指輪かなんか強請つて御遣りナ。金剛石とでも云つたら二の足を踏むか知らないが、サファイヤや真珠の位なら屹度二つ返事で悦んで持つて来るよ。物を取つて遣るのも功德になるのだから關やあ仕ない吹かけて御覽、相植は妾が巧く打つて上げるから。』

『あら嫌な御師匠さん！。妾あ指輪なんか欲しかあ無いんですよ。しか

も傳さんになんか貰ひたかあ有りません。』

『然様かネエ。汝はほんとに慾に掛けちやあ氣が弱いよ。だが取つて遣る方が可ぢやあ無いか。あの兎でも知れてるは子、汝の氣に入つたのを見て何様なに嬉がつてるか知れや仕ないよ。』

『だから妾あ厭なんですよ。その嬉がられるのが氣障ぢや有りませんか。』

『ホイ大失敗だネ、ハ、ハ、ハ、ハ、。指輪の談で想ひ出したが、先に汝があ何に（源を指す）御貰ひのは汝有つておいでゝ無いネエ。妾が見立てゝ買はせたんだからまだ覚えて居るが、汝彼品は何様か仕てお仕舞かエ。』

『だって御師匠さん、まだ妾が彼品を持つて居やう譯は無からうぢや有りませんか。いよく不實な人だと思ひつめた時は、口惜くつて口惜くつて仕方無かつたんですもの！。宿めて貰つて居た薬研堀のおとうさん——御師匠さんは御知んなさらないが妾の仲好しの其の家を出て、をかアしな氣になつてふらふらと兩國橋の上を往つたり復つたり



と云ひさして、ハ、ハ、ハ、と打笑へば、お龍もホ、と笑ひ出し、臺所の方に退きたるお熊さへ貰ひ笑ひしたり。

『あゝ、笑つたんで心持が佳い。さあお熊や方方戸締りを仕てお仕舞ひ。お龍ちゃんも歸路に御百度まで踏んで御呉れぢやあ、ほんとに随分おくれたびれだらう。』

随意に休めといふ意は明らかなれど、お龍は眠りたくも思はぬ眠つきなり。

『足は些ばかり草臥ましたけれど、先刻お湯に入つたのでもう治りまして、氣は疲勞も何も仕やあ仕ません。』

『いゝねえ若い人は！。戀もいさくさも其の威勢のある中の花なんだよ。妾なんざあ四つ木へ行かうもんなら二日位は腰が痛いので、しよぼけて居なくちやあならないんだよ。』

『ホ、虚言ばつかり！。まだ御師匠さんはお若いは。そんな事を仰あつても水々として在らつしやるぢやありませんか。』

『オヤ汝こそ人が悪いよ、御調戯で無い。いゝよ、何様せ奢らないから、』

ハ、ハ、ハ、ハ、。

『でもほんたうですよ。』

渴き氣味にや身を伸ばして及腰に火鉢の横手の茶棚より小き湯呑を取り、鐵瓶の湯を注ぎて心ゆたかに其を冷まして飲めるお龍を見れば、女には先づ目につく髪の毛の漆と黒くて加之膨くりとしたる鬢に、櫛の齒の痕あざやかに残りて、肌理密かに色白なる顔のほんのりと紅きは、たゞ是清き芳野紙の珊瑚を包めるに異ならず。ぎつに座つたる身の稍歪みて少し俯いたるに、細りとしたる領頸のいとゞしほらしく柔和に見えて、物ごし恰好冴えくと艶なり。

お關は見惚れたやうに良久しく見居つ。

『そりやまあ何様でも可としたところで、矢張りお前にやあ此頃には御馳走を仕無くちやあならない。ほんとに汝の氣合の好いには感心しちまふよ。歸路には馴染も無いお五十のためにお百度まで踏んで呉れるなんて、何様すれば其様なに優しい氣になつて、しかも俠氣な事が出来るだらう。妾や全然お前にやあ惚れつ仕舞つたよ。お前さへ吾家に

居てお呉れなら、あんなお五十なんか何様なつたからつて關やあ仕無  
いよ。』

『あらマア飛んでも無い酷い事を！。お師匠さんの左様仰やるのを本當  
にしたところで、五十子さんがお悪く御なんなさらうもんなら水野さ  
んていふ方が、何様に御騒ぎなさるか知れやしません！。』

『騒いだつて可やね、騒がして置やあ。』

『まだ詳しい御話を伺ひませんが、一體水野さんていふ方は何様いふ方  
なの？。』

『オヤ／＼をかしいよお龍ちゃんは。今日お晝過に家へ歸つて来てか  
ら、これで丁度水野の事を三度御聞だよ。ハ、まさか汝のやうに分  
つた人が、彼様な唐變木に何様か御爲だとも思やあ仕ないが子。よつ  
ほど氣になるやうな變な顔でも仕て居たのかエ。彼や何でも有りや仕  
ないのさ。たゞ彼村の學校の教師でもつて、平つたく云やあお五十に  
惚れてるといふだけの鈍痴氣なんだよ。』

『だつて其なら妾が御師匠さんの御使に、わぎ／＼彼の人のところへ行

「かなくつてもぢや有りませんか。」

『そりやお五十の事の關係から子、妾も困究つた時に彼男に融通を頼んだ事もあるし、今度も全然お五十が世話になつて居るからさ。』

『ぢやあ矢張り畢竟は五十子さんと一所になる譯の方ぢやありませんか。道理で心から底から御病人を大切に思つて居らつしやるやうに見えましたよ。ほんとに五十さんは御幸福な事！、あんな頼もしさうな方に御思はれなすつて！。』

『ところがお前、いくら彼の男が思つても、妾の云ふ事さへ聴かないやうな、へち頑固のお五十の事だから、嫌つて嫌ひぬいて關はないのだよ。彼の男の思なんぞは玻瓈に書く字で、以上經ても通りつこは無いのさ。』

『でも御師匠さんは終には彼の人を御婿さんにと思つてらつしやるでしやう。』

『だつてお五十が妾の云ふ事なんか聴くんぢ無いから仕方が無いやね。妾あ打棄つて置いて關やあ仕無いのさ。』

『あら憫然かはいさうに、それぢやあ彼の人の立場たちばが無いぢやあ有りませんか。』

『だから唐變木たうへんぼくで鈍痴氣どんちきだといふんだア子。』

『なんですつて?!、マア!。』

優やさしき姿すがたは其儘そのままに、身動みじろきは一寸いっすんもせざりしが、愛嬌あいけうこぼるゝ面おもてながら、じろりと斜ななめに上睨うねにらみして、お關せきを見やりたるお龍りゆうの眼めには、瞋いかるか恨うらむか蔑視さげすむか、怪あやしき一種いっしゆの氣味合籠あひこもりて、花はなの樹陰こかげに蛇へびの出いでたる其狀それにも似にたる風情ふぜいを見せたり。

## 其二十四

下物は論無し、たゞ鮮けきを用ゐる、酒は定例あつて、必ず醇なるを酌む、島木が性情見ゆる待遇に、日方は既酔ひて面を染め、大胡座かいて座れる、軍服の怒れる肩、五分刈の大なる頭、姿勢はまだ崩さず傲然として、葡萄酒の盞を手にしながら、親しきが中の打解け話におのづから催さるゝ歡びの色を浮べて、

『ア、快い心持だ、佳い酒だ。いつも葡萄酒とは贅澤な奴だ。羽勝が斷つて來たのは残念だが、酒は好し、主人の汝も好い男兒だし、客の乃公も大丈夫だし、談話が面白いので小氣味よく酔つた。』

と云ひさして満足げに仰飲ぎ盡せば、島木は例の布袋顔して笑ひ、

『ハ、、直と何でも自分の道に牽強けるナ。イヤ時の相場ぢやあ無い、全くの事だ。全く汝は好い男兒だ、所謂好漢だナ、快男兒だナ。』

『ハ、、大層風向きが好いが奢らねえぜ。何でまた其様急に値が上つた

のだ。』

『羽勝から聞いて皆知つたぞ。能く汝ア彼の馬鹿野郎の水野を、自分の危なかつた間際で世話を仕て遣つたナア。流石に島木は島木だ、好い氣象だ、と眞面目に感激して羽勝が話したぞ。』

『ハ、ハ、それで汝ア萬五郎に惚れたか。』

『ン、惚れたナア、ハ、ハ、。日方八郎も大に惚れ込んだぞ。』

『嫌な野郎だナア、好かねえ奴だ。何程惚れやがっても振りつけて遣るぞ。』

『何故?。』

『惚れやうが一體氣に食はねえから。』

『フーン、そりやあ又何で。』

『それが分らねえかえ、仕方が無えナア。後學のために記えて置きねえ、惚れるのに理由があるやうぢやあ眞物ぢやあ無えんだ。同じ此の萬五郎に惚れるならナア……………。』

『ウン。』

『乃公が悪い事を爲盡して、誰にも彼にも見放されてナ、溝ん中へでも蹴込まれたやうな時、萬ちゃん萬ちゃんツて云つて呉れるヤイ。左様したら其時ア此の萬ちゃんも、些少ア惚れ返して遣るめえもんでも無えんだ。』

『アツハ、ハ、甚い氣焰だナ、怪人の怪語だ。皮肉も其までになると愛嬌が出て面白い。ア、愉快だ大笑ひに笑つたので馬鹿に酔つた。久しぶりで一ツ朗吟をやるぞ。』

『宜からう。長い事汝の怒鳴るのも聞かなかつたナア。』

『蒲海の——曉の——霜は——、馬の——尾に——凝り——、葱山の——夜の——雪は——、旗の——竿を——撲つ——。エースト。』  
『鯨が鳴くやうな馬鹿聲だナア、障子が破けるからもう堪忍して呉れ、此邊の奴あ目を廻さあ。しかも唐人の囈語で毫末も分ら無え。戦の詩の句かえ。』

『ウン其様なもんだ。』

『有るかい？ いや、戦争は。』

『そんな事は乃公達よりは汝等相場師なんぞの方が却つて知つて居るといふことだぞ。』

如是云ひ終りし時日方は忽ち嚴然たる面色になりて、

『いかなナア、此様な世態では！。實に慨歎に堪へん。』

と正しく島木には語るならで獨り歎ぜしが、忽地にして氣をかへて、

『丈夫——誓つて國に許す、憤惋——復何か有らん、だ。少尉やそこら

で物を思ふナア生意氣なんなのだ。』

と自ら寛くして打笑ひたり。

『時に島木！。何様だ今から一緒に水野を訪はんか。實は羽勝が來たら

君を誘つて、三人で尋ねて遣らうと思つて居たんだが。』

『フーム、萬一すると汝出征るのかナ。』

『イヤまだ其は實際分らんが、出るやうになるにしても出ないにしても、

此頃の水野の面色も見て遣りたいし、少し話を仕度いと思ふ事も有る

から。』

『ぢやあ汝の剛直な其の氣に任せて手強い意見を仕やうと云ふんだナ。』

「勿論だ。戀愛だなんぞといふ下らない事に、可惜水野を沈ませて置いて、知らん顔を仕て居ては友道が立たんと思ふ。諫めて諫めて彼の水野を、舊の水野に復らせるつもりだ。」

『そりやあ汝、人情は厚い行爲だが、智慧は足らねえ事だぜ。』

『ナニ?。』

『マア下ら無えから止めたら宜からう!。』

『なんだと。』

## 其三十五

島木は莞爾と笑ひながら酒を注ぎやりつ、

『また直に左様ムキになつて突掛つて来るよ。いくら酒の氣があるからといつて野暮な男だナ。』

何も決して怒るのぢやあ無い。しかし乃公が爲やうと思ふことを下らないとは何だ。智慧が足りても足らなくつても其は仕方が無い。黙つて知らん顔を仕ては居られんから尋ねやうといふのだ。其をたゞ一概に止めたら宜からうと云はれては面白く無い。何が下らない？、何故智慧が足らん？。」

『何故と云て、考へて見りやあ分る事だ。』

『いや分らん分らん、考へて見ても分らんに定つて居る。よし乃公の爲ることが智慧が足らんにしろ、智慧が足らんために其効が無いのならば、汝が智慧を添へて効があるやうにして呉れても宜い譯では無い

か。水野は乃公ばかりの朋友では無い、汝にも矢張朋友では無いか。朋友の道は何様するのが正當だ。互に氣に入るやうにばかり仕て居ればそれで可といふのか、そんな理窟がどこにあるものだ。勿論朋友の助け合ふのは知れた事だが、劍術を習へば竹刀に會釋無く引撲ぎ合ふのが朋友の眞實だ、碁の一目、競射の一點に齒咬みを仕て争ひ合ふのも朋友の面白味だ。だから欺かぬ心も無くちやならん。競り合ふ氣も無くちやならん。まして眼に餘つたり腑に落ち無かつたりする事があれば、忠告も爲やうし、争ひも爲やうし、齒に衣被せず詈り詈らうとも、互に他人の物笑ひには、させぬやうに、又ならぬやうにと、男兒を磨きあふのが朋友の甲斐では無いか。それを何だ汝の此頃の仕方。たゞ水野の云ふ通りにばかり仕て與つて居る。そりやあ汝の俠氣の振舞は乃公も感謝して居るが、それほどに水野の爲を思ふなら、何故一步進んで諫めては遣らんか、彼の男の迷を解いては遣らんか、諫めても聽かずば何故争つては遣らん。士争友あれば令名に離れずといふ孝經の語を、たとひ其語を知らんでも其の理合に昧いやうな汝では

無いが、何故汝は水野の争友にはなつてやらんのだ。云はゞ汝は水野を愛して、鬮負に仕過ぎて間無つた事をさせて居るのだ。いや頭を振つても左様で無いとは言はさん、見晴しでの汝の言葉といひ、羽勝から聞いた事實といひ、先刻からの汝の話し工合といひ、汝は水野の争友となつて、彼の男に過失無からしめてやらうといふ考は有たんで、却つて庇護ひ立をする氣味がある。其様な下らんことが何處にあるものか。』

『オイ、大上段に振り被つて睨み廻すなあ其邊で措いて呉れ。下らなくつても乃公は構はねえ。汝の云ふ事位は乃公だつて知つてゐるが、諫めたつて争つたつて役に立たねえ事だから、乃公あ意見も云はずに打棄つて置くんた。迷ふなく、思ひ切れつて云つたつて、料簡方が煙管の羅宇のやうにすげかへが出来るものぢやあ無し、川柳が巧え事を云つて居らあナ、「極無理な意見魂魄入れ換ろ」つて。よく有る奴だが、いくら魂魄を入れ換ろつて云つたつて出来る相談じやあ無え。しかし水野に意見をするなあ汝の勝手だ。止せと云つたなあ大に御世話だつ

た。芝で會つた時云つた通りだ。乃公は乃公だから乃公は行かねえ。汝は汝だから行くなら行くがいゝ。』よしッ、汝が行かんでも乃公は行かなくつて！。是から直に行つて諫めて遣る。熱誠を以て大に争つて遣る。惘然に、可惜好漢の水野を區々たる戀愛に悶死させて堪るもんか。日方は彼のために争友を以て任じて遣る。智慧の足らん男がするの結果を見る。』

『ハ、ハ、乃公の云た事が氣に入らなかつたからつて激しちやあいけねえ。出かけるるなあ可いが其猛勢で行つて、水野と喧嘩をしちやあ汝いけねえぜ。彼の男もおとなしいけれど蟲持だから。』

『ハ、ハ、しかし乃公の言ふ事を聽かなかつたら攫み挫ぐかも知れんぞ。』

『戯談ぢやあ無えぜ、人が眞面目で云つて居るのに。』

『大丈夫だ、日方は粗暴でもまさか喧嘩はせん。』

『いゝかい大將、屹度だぜ、釘をさしたぜ。』

『ウン、よしッ。時に島木、』

『何だ。』

『汝が平生飲んで居る此の葡萄酒は中々佳いな。』

『それほどぢやあ無いがマア飲めるよ。』

『手土産に仕て持つて行つて、久しぶりで水野と談しながら飲むのだ。』

『些細な御用だ、二本ばかり徴發するぞ。』

『ハ、、、他の物を徴發して土産にするたあ此奴あ蟲がいく。可

いく。持つて行け、今縛らせやう。』

其二十六

牽牛花あさがおの花はなの色いろは去年こぞと今年ことしと同じく咲さかず、人ひとの心こころの傾かたむきは昨日きのうに  
 今日けふの變かはるが常つねながら、水野みづのは過すぎし日ひの日曜にちようより、如何いかにかしけん  
 今いままでの水野みづのにはあらずなりて、たゞ世よにありふれたる爺婆ぢやばあの無智無  
 學がくなるものゝ如ごとくなりつ、ひたすらに御佛みほとけを頼たのみ奉たてまつり、日ひにく我が  
 勤務つとめを終をはるや否いなや、直ただちに淺草あさくさに走はしり行ゆきて、本尊ほんぞんの御前おんまへに祈念きねんを凝こら  
 し、いつはり無なき心こころの誠まことを獻ささげつくして、さて後のちやうやく寓やどに歸かへるを  
 常習ならひとするに至いたりたり。

今日は日曜に當りて身に閑暇あれば、お濱の何時もながらに説怪みて  
 其の美しき眉を覇むるをば背後に見棄てつ、水野みづのは正午過ぐる頃に家  
 を立出でたり。吉右衛門は本家に相談事ありとて招かれて去り、お濱  
 一人餘令無く新刊の雑誌を讀みながら、お鍋を相手に留守し居るところへ、山路。ウン此家だナ。』と名札を讀んで獨語つやがてに、胴魔

聲の人を驚かすほど恐るしく大く、『頼む。』と一ト聲呼ばはれるものあり。『誰か呼ばはつたでがす。』さうだね、お前出て御覽ナ。お濱は猶雜誌をば讀みつ■け居しが、應對の模様は明らかに聞ゆ。『水野<sup>みづの</sup>は居る。』「今ア居ねえでがす。』『何處へ行つた。』『知りましねえ。』『しかし出たものならいづれ歸るだらう。』『どうでがすかサ。』『遠方わざわざ来たものだから上つて待つて居やう。』『いかねえでがす。待つてせえお前様。』お鍋は慌てゝ入り來りて、『いやに身體の魁偉い尊大の野郎<sup>みづの</sup>でがす。水野<sup>みづの</sup>さんの事聞くから不在だつて云つたら、上つて待たうと吐します。どうして呉れますべい。イヤな奴でがす。』と云へば、お濱は、辛く雜誌より目を離して笑ひ出し、『分らないねえお前は、言葉の様子ぢやあ水野<sup>みづの</sup>さんと仲の好は御朋友らしいぢや無いか。どれ妾が行つて見やう。と立出でたり。見れば客は血氣壯盛の陸軍士官にして、頭顱大く肩厚きさまは素人づくねの土人形などの如く、無骨一遍の正直さうな人なり。』水野<sup>みづの</sup>さんは今御不在ですが誰様でいらつしやいますり。言葉無く名刺を出して客の渡すを、お濱は手に取りて讀み

て急に笑顔になりぬ。未だ面をこそ對せざりつれ、水野みづのの友に其人あるよしの日方八郎といふ名は、かねて聞き馴れて何時と無ノ疏からず覺え居たればなり。『たしか島木さんやなんぞと御一緒の、御同國の方でいらつ■やいましたね。』一應念を推すお濱をば、日方は眼を正しくして一寸見しが、■訝かるべくも無き處女の、た■恰■なるべく見ゆるのみの清らなる娘なれば、『其通り。』と甚明らかに答へたり。『水野みづのさんは淺草まで御いになつたのですから、御退屈でも御待ちなされるならば、此方へ御通りなすつて。』何時かお濱の背後に出で來り居しお鍋はそつと袖を引きて『宜いですがかエ其様な事を仕て、何だか蟲の好かねえ厭な奴ですがすよ。』と心配し過して小聲に止むるを、お濱は顧みず日方を案内して水野みづのの室に通したり。日方は水野みづのが机の横にどつかりと座りて、『ハ、ア何も裝飾は無いが悪くない部屋だナ。相變らず有るものは書籍ばかりで、長物の無いところは流石に感心だと先づ評する時、お濱はお鍋が汲み來りし茶を鷹むれば、「君は此家の娘さんかナ。どうだ水野みづのは。此頃も相變らず勉強か。』と話し仕度さに打

解けて問ふを、水野みづのくと呼びつけにするが小面■くてか、『ハイ。』と僅々一句に答を切りて、『御自由においでなすつて。』と言ひ棄てしまふ、■と次の間に出でる唐紙ぴつしやり、お鍋の後を追ふて茶の室に退けば、お鍋は、手の甲を口にあてゝ笑ひながら、『女を呼ぶるのに君だなんて、ホ、ハ、ハ、と、げらつきて已まず。お濱も睨む真似して叱りは叱りながら、おのれも口のあたりに笑を浮かめぬ。話亂無き所在無さの餘り、日方は其邊を見廻しつ、机の上に在りし折本に偶然目を着けて、手に取りて何心なく披き見しが、忽ち其所に抛り出し。「何だ、普門品。何だ是は何だ。御有難連の誦むものではないか。まさか水野みづのが信心するのではあるまいが、如是なものが机に載つて居るのは何様した馬鹿な事だ。と其處に罵るべき人にもあるが如くに罵つたり。